



埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第194集

鴻巣市

新屋敷遺跡D区

大蔵省鴻巣宿舍建設工事関係
埋蔵文化財発掘調査報告
〈第2分冊〉

1998

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

口絵
序
例言
凡例
目次

2. 古墳群における供献の様相	225
3. 新屋敷古墳群の様相	231
附編 古墳時代出土遺物の胎土分析	261

〈第2分冊〉

〈第1分冊〉

I 調査の概要	
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	3
II 遺跡の立地と環境	4
III 遺跡の概要	11
IV 先土器時代の調査	
1. 調査の概要	15
2. 層位	15
3. 石器集中	18
4. 出土石器	21
5. 器種別分布	30
6. 礫群	33
先土器時代石器観察表	39
V 縄文時代の調査	
1. 調査の概要	53
2. 住居跡	53
3. 土壌	57
4. グリッド	61
VI 古墳時代前期の調査	
1. 調査の概要	69
2. 住居跡	69
VII 古墳時代後期の調査	
1. 調査の概要	73
2. 古墳跡	73
3. グリッド	211
埴輪観察表凡例及び計測表	214
VIII 調査の成果と課題 I	
1. 先土器時代のまとめと成果	219

IX 平安時代の調査	
1. 調査の概要	281
2. 住居跡	283
3. 井戸	444
X 中・近世の調査	
1. 調査の概要	447
2. 掘立柱建物跡	449
3. 欄列跡	473
4. 井戸	486
5. 溝	507
6. ビット群	519
7. 不明遺構	521
8. 土壌	523
9. グリッド	579
新旧対照表	587
XI 調査の成果と課題 II	
1. 平安時代の出土土器について	
(1) 出土土器の年代	591
(2) 酸火焔成の土器群	595
2. 新屋敷遺跡の性格について	
(1) 江戸時代以前の新屋敷遺跡	600
(2) 江戸時代の新屋敷遺跡	601
(3) 出土遺物の産地と特徴	605
附編	
1. 平安時代出土遺物の胎土分析	609
2. 近世漆器の塗膜分析	619

〈第3分冊〉

写真図版

IX 平安時代の調査

1. 調査の概要

新屋敷遺跡D区で検出された平安時代の遺構は、竪穴住居跡69軒、井戸跡3基である。この他の遺構でも平安時代の遺物を出土する井戸跡や土壇が検出されたが、出土状況が不自然なため、掲載から除外した。

住居群は、標高約16mの等高線より上の台地上に立地している。以前の調査でもある程度は明らかになっていたが、基本的には東側から入る谷を取りまくように集落が形成されている。住居群の分布は、新屋敷遺跡全体でも西寄りに集中する傾向がみられ、出土遺物からは西寄りか新しくなる傾向が窺われる。

また、集落が形成されるにあたって、前代の遺構である古墳跡の分布が大きな影響を与えている。西側に築造されたSS55～59は中規模で、周溝も浅いことから、早い時期に周溝が埋まり、開墾されていったものと考えられる。一方、大型のSS60・65は平安時代になっても墳丘が残ったとみられ、住居の建築に大きな障害となっていたものと考えられる。

集落の存続した期間は、出土遺物から9世紀後半から10世紀後半にかけての約百年間と考えられる。また、集落はその形成された位置や出土遺物の年代からA～Eの5つのグループに分類することが可能である。A群は標高18m前後の位置に形成され、C区と連続する一群である。住居間は距離が保たれ、重複関係がみられないものである。出土遺物は9世紀後半が主体である。

B群はA群の北側、調査区の西側隅に位置している。A群に比べて住居間の距離が狭く、重複関係も生じている。また、出土遺物では須恵器に混じって、酸化焰焼成の土器群が全体の約4割の住居跡に伴っている。出土遺物は9世紀後半から10世紀初頭が中心である。

C群は標高17～18mの位置に形成され、B群の東側に位置している。B群同様、住居間には重複関係がみられ、酸化焰焼成の土器群も混じていた。出土遺物

は9世紀後半から10世紀初頭が中心である。

D群はC群の北側に位置し、集落内では最も密度の高い一群で、重複関係も顕著である。また、D群は酸化焰焼成の土器群を含む比率が最も高い。出土遺物は9世紀末頃から10世紀初頭頃が中心である。

E群は集落の北東寄り、標高の最も低い16m付近に形成されている。集落はさらに北側にのびることが予想されるため、もう少しまとまった単位で形成されているものとみられる。住居跡はA～D群に比べて形態がやや不規則で、小型化している。出土遺物は10世紀初頭から中頃が中心である。

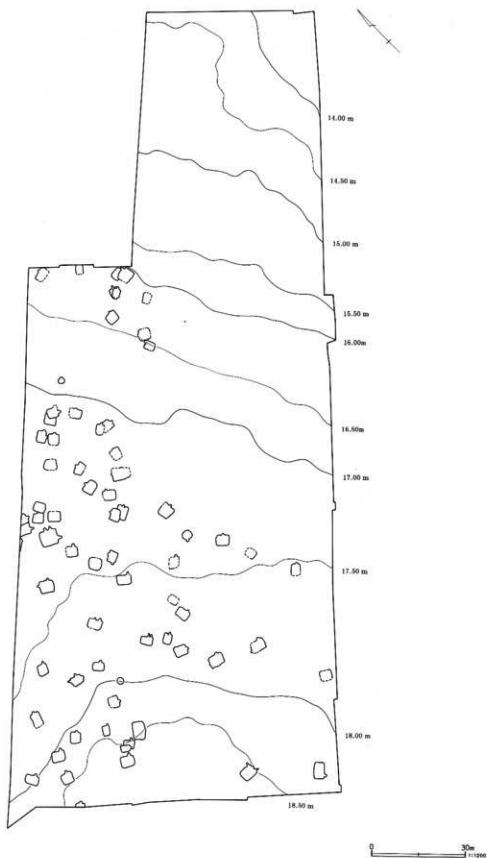
住居跡は一辺が3～4m、深さは0.2～0.3m、平面形態は長方形のものが多く、カマドは北辺または東辺に付設され、複数を備える住居が多かった。また、床面には炉跡と考えられる掘り込みがあり、約10軒の住居跡で検出された。掘り込みは浅かったが、焼土や炭化物の他に鉄の粒子、製品を覆土中に含んでいる場合があり、小鍛冶を行っていた可能性が高くなった。

出土遺物には、須恵器環、蓋、埴、高台付埴、長頸瓶、広口壺、甕、土師器環、甕、鉢、酸化焰焼成環、埴、灰釉陶器皿、埴、紡錘車、刀子、鋤先、手鎌、土製支脚、砥石などがある。

供膳具は須恵器が中心で、土師器環がわずかに含まれるが、10世紀前後になると酸化焰焼成環、埴が増加し、集落の最終段階には須恵器に取って代わる傾向が窺われる。また、須恵器の生産地は、当初北比企産が主体であったが、次第に末野産なども入り、多様化している。

煮沸具は土師器甕と台付甕が主体で、いずれも「コ」の字口縁である。また、酸化焰焼成環などが供膳具にあらわれるようになると、甕も器厚で口縁部の短いものが主体となってくる。

第201図 平安時代の遺構配置図



2. 住居跡

第51号住居跡 (第202図)

調査区南西部、M-7グリッドに位置する。調査区南西部は住居跡の密度が薄いが、相対的に確認面から床面までは深いものが多い。

平面形態は長方形で、東辺に2基、北辺に1基のカマドをもつ。規模は長さ4.45m、短辺3.34m、深さ0.52mである。

カマド (第202図) はa→b→cの順に構築され、カマドcは天井部が一部残存していた。カマドの軸はカマドcで検出することができたが、約半分は崩落していた。カマドの形態や大きさは各々異なるが、カマドcの段階になると小規模化する。カマドaの焚口付近は焼土が硬くしまった状態になっており、位置関係からカマドcに伴う灰を掻きだしたものと考えられる。

貯蔵穴はカマドbの右側に楕円形のピット (P1) を1基検出した。覆土には焼土、炭化物、土器を含み出土状況から、これらは埋没時に混入した可能性が高い。また、P2は位置や大きさなどから柱穴とみられる。

壁溝は全周する。南壁のP1寄りに途切れる箇所があるが、出入口の可能性が考えられる。

床面は平坦で、壁溝の周辺を中心に貼り床が確認

できた。

出土遺物 (第203図)

遺物は須恵器環、蓋、高台付埴、長頸瓶、土師器甕、台付甕などが出土している。出土位置はカマド周辺を中心に、貯蔵穴、壁溝、覆土内などから出土している。一部の環や甕などは、遺構確認時にカマド上層で完形に近いものが出土しており、後に周辺の住居跡から廃棄されたものと考えられる。

1-11は須恵器環で、口径は12-13cm、器高は4cm前後である。口縁部から体部は緩やかに内湾する。底部の調整は回転糸切りである。12-15は高台付埴で、口縁部は外反し、体部は環と同様緩やかに内湾する。16は須恵器蓋の小破片で、14の口縁部付近には黒書されているが、破片が小さく判読できない。17-19は須恵器長頸瓶の胴部下半破片である。20は須恵器広口壺の破片である。叩きの痕跡はなかった。

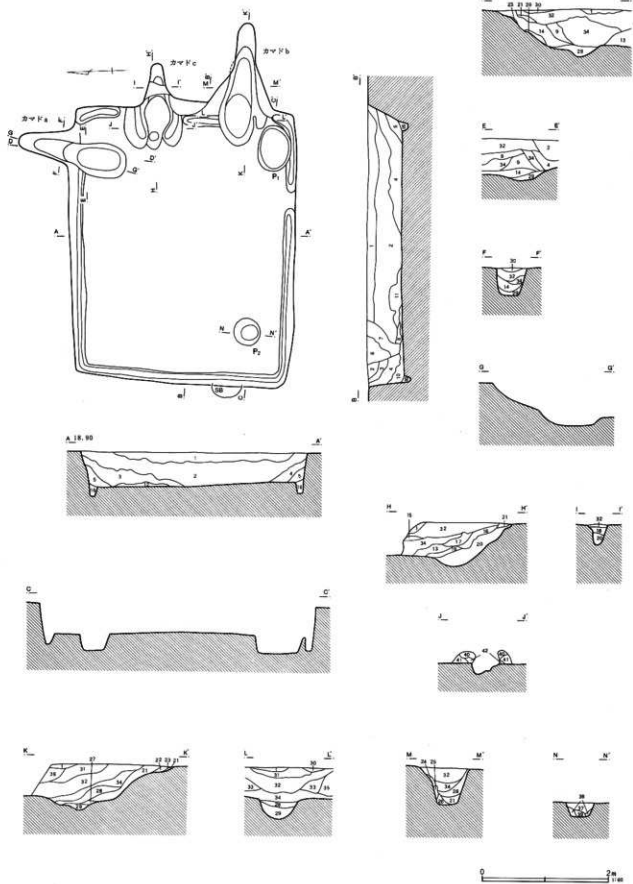
23と24は台付甕の破片で、脚部を欠く。23はP1、24はカマドcの左袖付近から出土している。21・22は土師器甕で、22はいわゆる「コ」の字口縁の破片である。図示はしなかったが、この他に胴部下半から底部の破片も少量出土している。25は土師器埴または鉢の破片で土製の支脚で、口縁部を欠く。底部は回転糸切

SJ51

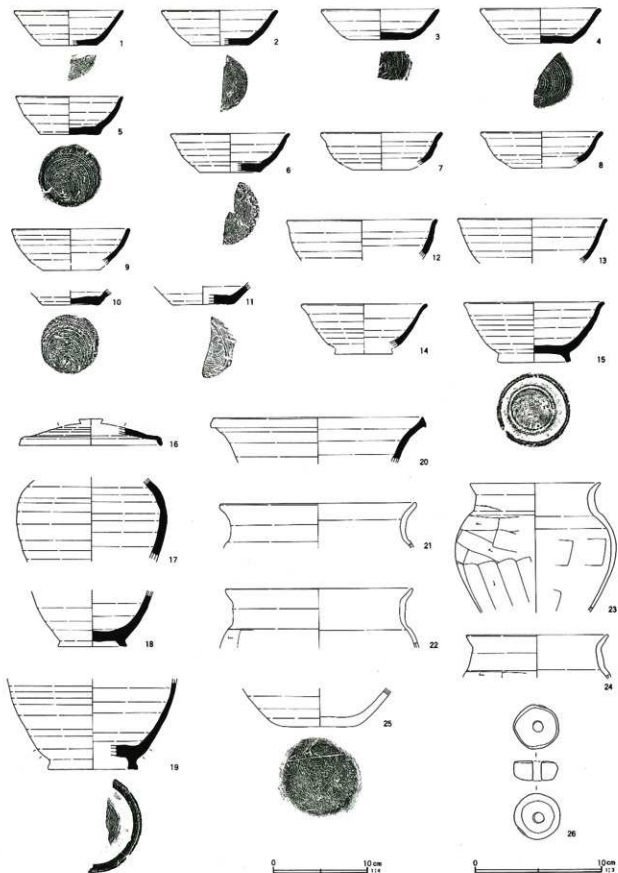
1 暗褐色土	ローム粒子、焼土粒子少量含む。
2 暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック、黒褐色ブロック多量含む。
3 暗褐色土	ロームブロック多量含む。
4 暗褐色土	ローム粒子、焼土粒子少量含む。
5 明褐色土	ローム粒子少量含む。
6 暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック、灰色ブロック少量含む。
7 暗褐色土	ロームブロック少量含む。
8 暗褐色土	ロームブロック、灰色粘土ブロック少量含む。
9 灰褐色土	焼土粒子、灰色粘土ブロック多量含む。
10 黒褐色土	ロームブロック多量含む。軟質、粘性あり。
11 明褐色土	焼土粒子、ローム粒子少量含む。
12 暗褐色土	焼土粒子、ローム粒子、灰色粒子少量含む。
13 暗褐色土	焼土粒子多量含む。
14 灰褐色土	焼土粒子少量含む。軟質。
15 暗褐色土	ローム粒子、焼土粒子少量含む。軟質。
16 暗褐色土	ローム粒子、焼土粒子少量含む。軟質。
17 暗褐色土	ローム粒子、灰色粒子多量、焼土粒子少量含む。
18 灰褐色土	灰色ブロック、ロームブロック多量含む。粘性あり。
19 暗褐色土	焼土塊、灰色ブロック少量含む。軟質。
20 暗赤褐色土	焼土塊、灰色ブロック多量含む。軟質。
21 赤褐色土	ローム粒子少量、焼土粒子多量含む。

22 暗褐色土	焼土粒子多量含む。
23 赤褐色土	ローム粒子、焼土粒子多量含む。
24 灰褐色土	灰色粘土塊、焼土ブロック多量含む。
25 暗褐色土	焼土粒子、焼土ブロック少量含む。
26 黒褐色土	炭化物、焼土ブロック少量含む。
27 暗褐色土	焼土粒子、炭化物少量含む。軟質。
28 暗褐色土	灰色粘土粒子、ローム粒子、焼土粒子少量含む。
29 暗褐色土	焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子、ロームブロック少量含む。軟質。
30 暗褐色土	ローム粒子少量含む。
31 暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック少量含む。
32 暗褐色土	ローム粒子、焼土粒子、ロームブロック、灰色粒子多量含む。
33 暗褐色土	焼土粒子少量含む。
34 暗褐色土	焼土粒子、灰色粘土ブロック多量含む。
35 暗褐色土	ローム粒子、ロームブロック、灰色粘土粒子少量含む。
36 暗褐色土	ローム粒子多量含む。
37 暗褐色土	ローム粒子、焼土粒子、灰色粘土粒子少量含む。
38 暗褐色土	ロームブロック少量含む。
39 暗褐色土	ローム粒子少量含む。
40 灰色土	焼土粒子、焼土ブロック多量含む。
41 灰色土	炭化物少量含む。粘性あり。
42 暗灰色土	焼土粒子少量含む。

第202図 第51号住居跡



第203图 第51号住居跡出土遺物



りである。26は石製の紡錘車である。

れる。

住居跡の年代は、出土遺物から9世紀後半と考えら

第51号住居跡出土遺物観察表 (第203図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.6)	3.7	(5.6)	BCK	A	青灰色	20	南北企産
2	坏	(12.6)	3.7	(6.0)	BCK	A	灰色	30	南北企産
3	坏	(12.5)	3.2	(6.2)	BCHK	C	淡灰褐色	20	南北企産
4	坏	(12.8)	3.7	(6.8)	BCK	C	淡灰色	30	南北企産
5	坏	11.3	4.0	6.3	BCK	C	淡青灰色	70	南北企産
6	坏	(12.5)	4.1	(6.4)	BCEK	A	灰色	30	南北企産
7	坏	(13.0)			BCK	A	灰色	20	南北企産
8	坏	(13.0)			BCK	A	暗灰色	20	南北企産
9	坏	(12.6)			BCKL	A	暗青灰色	20	南北企産
10	坏			6.0	BCKL	A	暗青灰色	30	南北企産
11	坏			(6.4)	BCK	A	灰白色	20	南北企産
12	高台付埴	(16.0)			BCK	A	暗灰色	20	南北企産
13	高台付埴	(16.0)			CKL	A	黒灰色	20	南北企産
14	高台付埴	(13.5)			BK	A	暗青灰色	20	南北企産
15	高台付埴	(15.0)	6.3	7.9	BCEKL	A	青灰色	70	南北企産
16	蓋	(15.2)			BCK	C	淡青灰色	10	南北企産 器面風化
17	長頸瓶				BCKL	C	暗青灰色	10	胴部径(16.0cm) 南北企産
18	長頸瓶			7.2	BCKL	A	灰色	10	自然釉付青
19	長頸瓶			(9.6)	BCKL	A	青灰色	20	南北企産
20	広口壺	(22.2)			BCKL	A	暗灰色	10	
21	甕	(21.0)			BEK	A	茶褐色	10	
22	甕	(20.0)			BHK	A	茶褐色	10	
23	台付甕	(13.8)			BK	A	暗褐色	25	
24	台付甕	(15.0)			BHK	A	赤褐色	10	
25	埴			7.8	BKL	A	淡灰褐色	60	内器面剥離 底部炭化物付着?
26	紡錘車	長径3.6×短径3.4×孔径0.8×厚さ1.55cm					灰白色	100	重量26.9g

第52号住居跡 (第204図)

調査区の南西隅、K-9グリッドに位置する。住居跡は江戸時代の建物遺構と重複したり、縦横に擾乱が入るなどして遺存状態はよくなかった。

形態は長方形で、カマドは長辺の南西隅に付設されていた。規模は長辺4.96m、短辺3.12m、深さ0.41mである。

カマドは擾乱によって一部を壊されているが、掘形は床面よりやや窪んだ深さであることから、使用時は床面とほぼ同一レベルとみられる。煙道は短く、急角度で立ち上がっている。袖は僅かに残っていたが、既に原形を留めてはいなかった。比較的残りの良い左袖には灰色の粘土ブロックが所々にみられ、構築時に補強材として用いたものと考えられる。貯蔵穴と考えられるピット(P1)は、カマド右袖よりに設けられ、

壁溝や壁にかかっていた。ピットは楕円形で、壁溝を部分的に埋めて設置したものと考えられる。

壁溝はカマドの周囲を除いて全周し、北側が僅かに深くなっている。床面は平坦で、貼床は認められなかった。また、検出されたピットはいずれも後世のもので、住居に伴う柱穴ではなかった。

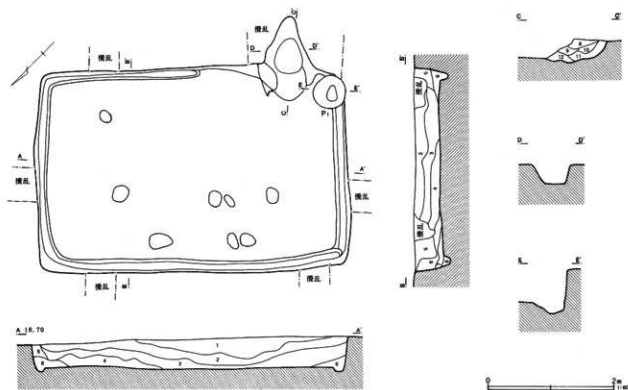
出土遺物 (第205図)

遺物は少なく、カマド周辺を中心に出土している。出土遺物は須臾器は小破片のみで、土師器の台付甕、甕がある。

1~3は台付甕で、1は口縁部、2は胴部、3は脚部の破片である。口縁部は「コ」の字口縁で、やや短い。4は土師器甕で、口縁部はいわゆる「コ」の字口縁である。

住居跡は、出土遺物から9世紀後半と考えられる。

第204図 第52号住居跡

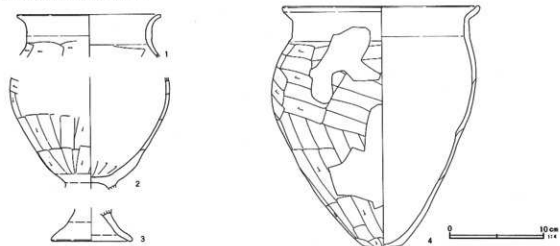


S J 52

- | | |
|---------|----------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 2 褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。 |
| 6 暗黄褐色土 | ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。 |
| 7 黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |

- | | |
|---------|--------------------------------|
| 8 褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 9 灰褐色土 | 焼土粒子、暗褐色ブロック、黒褐色ブロック少量含む。粘性あり。 |
| 10 暗褐色土 | ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子少量含む。 |
| 11 暗褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子、灰褐色ブロック少量含む。 |
| 12 黒褐色土 | 炭化粒子少量、焼土粒子多量、灰褐色ブロック少量含む。 |

第205図 第52号住居跡出土遺物



第52号住居跡出土遺物観察表 (第205図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕	(15.2)			HK	A	暗赤褐色	10	胴部径(16.8cm) 脚部
2	台付甕				EK	A	暗赤褐色	65	
3	台付甕			8.6	EK	A	暗赤褐色	80	
4	甕	21.0	25.4	4.1	BEK	A	暗赤褐色	70	

第53号住居跡 (第207図)

調査区の北西、O・P-5グリッドに位置する。住居跡は、カマドと壁面の一部を後世の土壌や掘立柱建物跡などと重複しているが、遺存状態は概ね良好であった。

平面形態は長方形で、北寄りの長辺右寄りにカマドが1基付設されていた。規模は長辺4.25m、短辺3.00m、深さ0.34mである。主軸方向は、N-33°-Eである。

カマドは住居跡の規模に比べて大型で、煙道がやや長い。長さは1.64m、焚口部の長さについては0.55mである。掘形は床面より約10cmを皿状に掘り込み、煙道との境に直径約10cm、深さ約10cmのピットをもつ。ピットの覆土は、ロームブロックなどを主体とする黄褐色土で構成されていた。燃焼部は緩やかな皿状で、焼土の堆積はやや厚い。袖の遺存状態は良好ではないが、左右とも検出された。袖は左右とも灰白色粘土とロームブロックで構築しているが、焚口付近は、廃棄後に崩落して周囲の覆土に混入していた。また、袖や壁面は赤く硬化した状態になっており、ある程度の期間使用されていたものと考えられる。

貯蔵穴はカマドの右側コーナーで検出されたが、壁溝と重複している。壁溝の方が深くなっていたがその先後関係は確認できなかった。

壁溝は全周し、深さは約10cmである。床面は平坦で、ほぼ全面が張り床され、硬くつきかためられていた。また、西側から南側の床面にかけては、炭化物が多く確認された。なお、柱穴は検出されなかった。

出土遺物 (第206・208図)

遺物はカマド、床面、覆土中から出土している。主な出土遺物には須恵器環、皿甕、土師器台付甕、甕、砥石釘などがある。この他に混入とみられる縄文中期

の土器片が出土している。

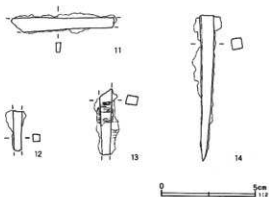
1・2は須恵器環である。体部から口縁部にかけては強く内湾し、口縁部で緩やかに外反する。3・4は須恵器皿の破片である。底部は回転糸切りである。5は、須恵器甕の胴部上半の破片である。外面には自然釉が付着しているが、叩きの痕跡はなかった。内面は当て具の痕跡が明瞭に残っていた。6・7は土師器台付甕口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部はナデ、胴部はヘラケズリによって調整されている。8・9は土師器甕の破片である。口縁部はいわゆる「コ」の字口縁で、8の胴部は横方向のヘラ削り、9は斜めのヘラケズリで成形されている。10は砥石の破片で、中央部を中心によく使い込まれている。

11は鉄製の刀子の破片で基部とみられる。

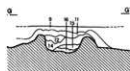
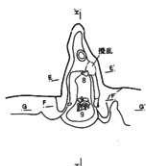
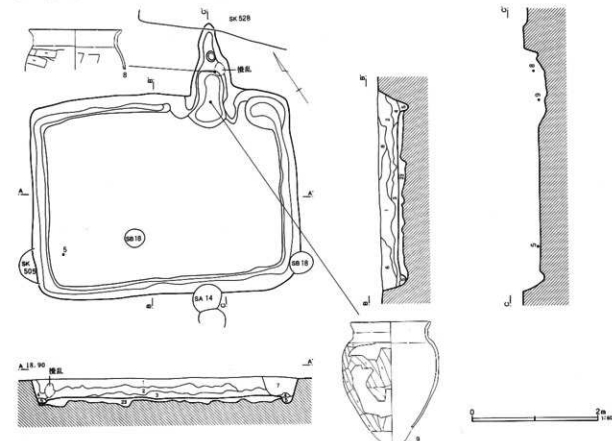
12~14は鉄釘の基部付近の破片である。断面は方形で錆の進行が著しい。

住居跡の年代は、出土遺物から9世紀後半と考えられる。

第206図 第53号住居跡出土遺物(2)



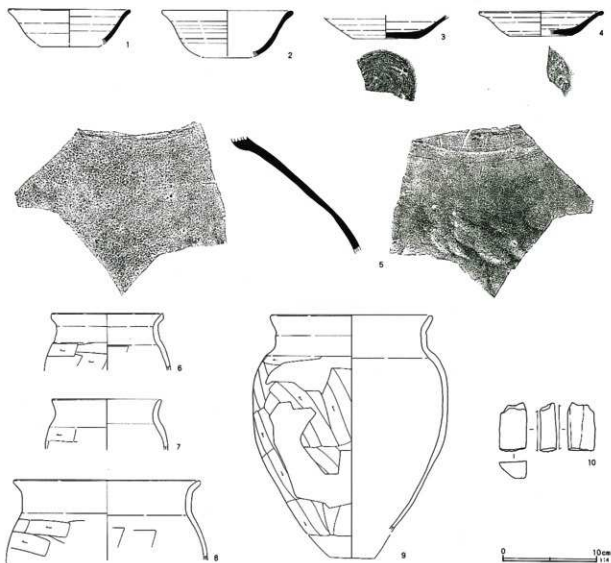
第207図 第53号住居跡・カマド・遺物分布図



S J 5 3

- 1 暗褐色土 焼土粒子、ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒子少量、ローム粒子、ロームブロック多量含む。
- 3 暗褐色土 炭化物、焼土粒子、焼土ブロック、ロームブロック多量含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量含む、軟質。
- 5 明褐色土 ローム粒子少量含む。
- 6 暗褐色土 焼土粒子少量、灰色ブロック多量含む、軟質。
- 7 暗灰褐色土 灰色ブロック多量含む。
- 8 暗褐色土 炭化粒子、ローム粒子少量含む。
- 9 暗褐色土 ローム粒子、炭化粒子少量含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒子少量、灰褐色粘土粒子多量含む。
- 11 黄褐色土 灰白色粘土粒子多量含む。
- 12 赤褐色土 焼土粒子、灰白色粘土粒子多量、炭化粒子少量含む、粘性あり。
- 13 暗褐色土 ローム粒子微量、焼土粒子、炭化物少量、炭化粒子多量含む。
- 14 暗赤褐色土 焼土粒子、炭化粒子多量含む。
- 15 赤褐色土 焼土粒子、焼土ブロック多量含む。
- 16 褐色土 ロームブロック多量含む。
- 17 暗褐色土 焼土粒子多量含む。
- 18 灰褐色土 灰褐色粘土粒子多量含む。
- 19 赤褐色土 焼土粒子多量、ローム粒子少量含む。
- 20 褐色土 ローム粒子、灰褐色粘土粒子多量含む。
- 21 灰褐色土 ローム粒子多量、灰褐色粘土粒子少量含む。
- 22 暗黄褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック多量含む。
- 23 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む、瓶形。

第208図 第53号住居跡出土遺物(1)



第53号住居跡出土遺物観察表 (第206・208図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	坏	(13.0)			BK	A	青灰色	20	自然輪付着 当て具痕	
2	坏	(14.0)			BK	A	淡褐色	10		
3	皿			6.8	BKL	C	暗灰褐色	50		
4	皿	(13.2)	2.6	(6.6)	BKL	A	灰色	30		
5	甕				CK	A	灰色	20		
6	台付甕	(12.0)			K	A	赤褐色	65		
7	台付甕	(11.6)			BK	A	暗赤褐色	20		
8	甕	(20.0)			BK	A	淡赤褐色	20		
9	甕	(17.4)			EK	A	淡橙褐色	40		
10	砥石	長さ(5.0)×幅2.9×厚さ1.7cm、重さ40.2g								刀子窩か?
11	刀子	長さ(5.3)×基幅0.7×厚さ0.2cm、重さ4.36g								
12	釘	長さ(2.0)×幅0.3×厚さ0.4cm、重さ1.79g								
13	釘	長さ(3.4)×幅0.6×厚さ0.5cm、重さ3.26g								
14	釘	長さ(7.6)×幅0.6×厚さ0.6cm、重さ11.93g								

第54・57号住居跡 (第209・210図)

調査区の西、P-5グリッドに位置している。ともに南側の壁面を後世の土壌SK528に、S J 54は東隅をSK527と重複している。S J 54と57の先後関係は、土層断面の観察からS J 57が新しく、S J 54が古いことか確認された。

平面形態はともに長方形である。S J 54は大型で、掘り込みが深く、形態が整っている。一方、S J 57は小型で、掘り込みが浅く、SK528との重複によってカマドの形態が不明瞭な部分がある。規模はS J 54が長辺3.51m、短辺2.58m、深さ0.48m、S J 57は長辺3.00m、短辺1.86m、深さ0.14mである。主軸方向はS J 54はN-44°E、S J 57はN-66°Eである。

S J 54のカマドは北寄りの長辺、右寄りに付設されていた。袖は既になく、長さは1.54mとやや長い。燃焼面の掘形は深さが10~15cmあり、レンズ状に掘り込まれている。燃焼面の下層はロームブロックを主体とする層で、焼土の混入は少ないことから、床面と同様貼り床状にして燃焼面を構築したものとみられる。また、燃焼面の直上には、側壁や天井の崩落とみられる粘土や焼土がブロック状に堆積していた。しかし、袖や焚口付近は、粘土や焼土以外に少なく、後世の攪乱等で壊された可能性もある。貯蔵穴はカマドの右側に位置し、壁溝は貯蔵穴を避けるように壁際に掘り込まれていた。平面形態はピット状で、炭化物や焼土が多く混入している。

床面は比較的平坦であるが、壁溝際の凹凸が目立つ。西辺の壁付近の床面には、炭化物が長さ約1.50m、幅約1.20mの範囲に広がっていた。床面には焼土は少なく、焼失家屋とは考え難い。貼り床は床全面に及ぶが、特に中央部は深さ約15cmあることが明らかになった。壁溝は全周し、西壁付近の幅がやや広くなる。

S J 57のカマドは、東寄りの短辺中央に付設されていた。S J 54と同様既に袖はなく、燃焼面の掘形は検出できたが、煙道はSK528と重複していたため、確認することができなかった。燃焼面の覆土には焼土や粘土の粒子が含まれていたが、浮いた状態にあり、二次

的な堆積の可能性がある。

床面は全体的に凹凸が著しく、貼り床は認められない。また、壁溝も存在しない。

出土遺物 (第212図)

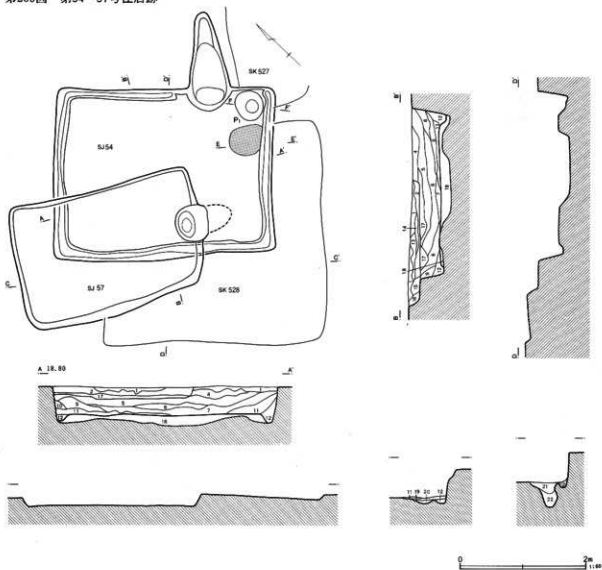
S J 54はカマド、床面、覆土中から出土している。遺物は床直上に近い状態で出土している場合が多く、覆土中のものは混入した可能性も考えられる。主な出土遺物には、須恵器坏、蓋などがある。

1~4は須恵器坏で、口径約12.5cmと約13.5cmの2種類、器高は3.5~3.7cm、底径は6~7cmである。体部から口縁部へは緩やかに内湾する。1と4はやや厚みがあり、口縁部で僅かに外反する。4は底部と内面に墨書「十」がある。6は須恵器高台付碗の底部破片で、内面底に「十」のヘラ書きされている。紡錘車への転用を目的とした可能性が考えられる。8は須恵器蓋で口径約11cmと小型である。摘みは擬宝珠である。

S J 57はカマドと床面から出土している。主な出土遺物には須恵器、高台付碗、土師器甕がある。高台付碗や台付甕には、ヘラで「十」と描かれたものがある。5と7は須恵器高台付碗で、口径12.5~13cm、器高5~6cmである。底部は回転糸切りで、高台は貼りつけ高台である。5はS J 57の覆土中より出土したが、位置が不明瞭であったため、遺物分布図からは除外した。9と10は土師器甕の破片である。9は口縁部が短く、全体に厚みがある。口縁部は横方向のナゲ、胴部は縦及び斜め方向のヘラケズリで成形されている。10はやや大型で、9と同様口縁部が短く、胴部上半に最大径がある。

住居跡の年代は、出土遺物からS J 54は9世紀後半、S J 57は10世紀前半と考えられる。

第209図 第54・57号住居跡

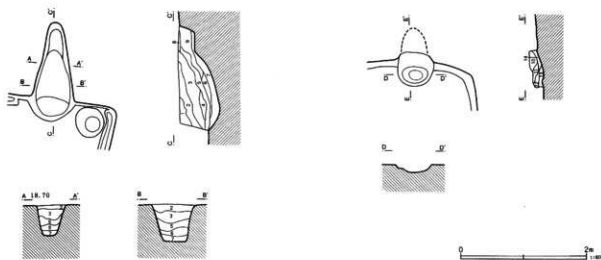


S J 54・57

- | | | |
|----|-------|--------------------------------|
| 1 | 暗灰褐色土 | ローム粒子少量、灰褐色粒子多量含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子、焼土粒子少量、炭化粒子、ロームブロック微量含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | 焼土粒子少量、ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量、炭化粒子少量含む。 |
| 6 | 黄褐色土 | 焼土粒子微量、ローム粒子、炭化粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 7 | 暗褐色土 | ローム粒子少量、炭化粒子多量含む。 |
| 8 | 黄褐色土 | 焼土粒子少量、ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 9 | 褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 10 | 褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |

- | | | |
|----|-------|----------------------------|
| 11 | 褐色土 | ローム粒子、焼土粒子少量、ロームブロック微量含む。 |
| 12 | 暗黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 13 | 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子少量含む。 |
| 14 | 赤褐色土 | 焼土粒子多量含む。 |
| 15 | 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 16 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 17 | 暗褐色土 | ローム粒子、炭化粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 18 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック、暗褐色ブロック少量含む。 |
| 19 | 赤褐色土 | ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子多量含む。 |
| 20 | 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 21 | 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子少量含む。 |
| 22 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |

第210図 第54・57号住居跡カマド

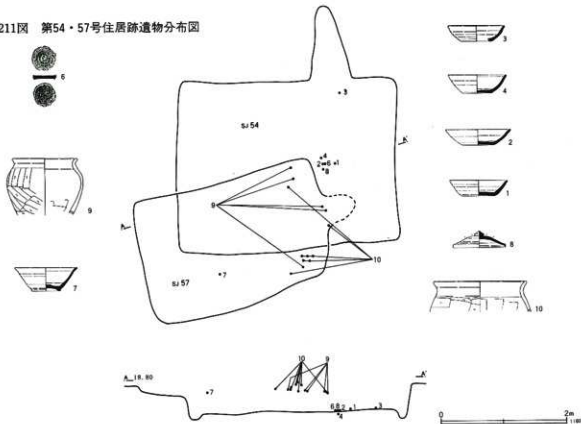


SJ 54 (左)・57 (右) カマド

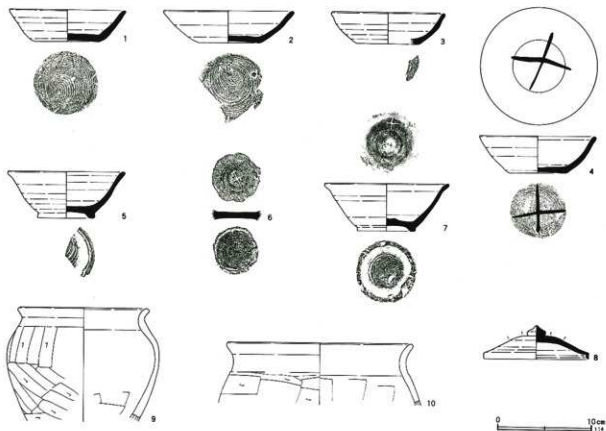
- | | |
|---------|---------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子微量含む。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒子少量、焼土粒子多量含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子多量、焼土粒子、焼土ブロック少量含む。 |
| 4 灰白色土 | 灰白色粒子、焼土粒子多量含む。 |
| 5 赤褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック多量含む。 |
| 6 赤褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子多量、灰白色粒子少量含む。 |
| 7 暗黄褐色土 | 焼土粒子少量、ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |

- | | |
|---------|--------------------|
| 8 暗褐色土 | ローム粒子少量、焼土粒子多量含む。 |
| 9 褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 10 暗褐色土 | ローム粒子微量、焼土粒子多量含む。 |
| 11 暗褐色土 | ローム粒子、褐色粒子少量含む。 |
| 12 黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 13 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 14 褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |

第211図 第54・57号住居跡遺物分布図



第212図 第54・57号住居跡出土遺物



第54・57号住居跡出土遺物観察表 (第212図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	12.4	3.4	6.6	BKL	A	暗青灰色	80	末野産か?
2	環	(13.9)	3.4	6.3	BCKL	A	灰色	50	南比企産
3	環	(12.2)	3.4	(6.8)	CK	A	青灰色	15	
4	環	12.4	4.0	6.0	BCKL	C	淡茶褐色	70	南比企産 墨書
5	高台付埴	(12.4)	4.9	(6.0)	BKL	C	淡青灰色	40	
6	高台付埴				IIIK	C	淡暗褐色	10	内面見込部分「×」のヘラ記号 末野産
7	高台付埴	(13.4)	5.0	6.2	BKL	C	暗褐色	70	「+」のヘラ記号あり?
8	蓋	(11.2)	3.6		BCKL	A	灰色	40	南比企産
9	甕	(14.0)			BKL	A	淡暗赤褐色	25	
10	甕	(20.0)			K	A	淡茶褐色	25	外面に鉄分付着

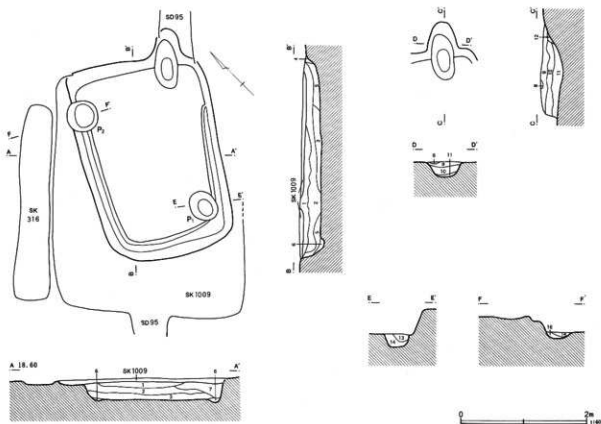
第55号住居跡 (第213図)

調査区の西、Q-5グリッドに位置している。覆土上層やカマドを後世の土壌SK1009と溝跡SD95と重複している。平面形態は長方形で、北辺にカマドが1基付設されていた。規模は長辺3.19m、短辺2.20m、深さ0.32mとやや小型である。主軸方向はN-42°-Eである。

カマドは長さ0.95mであるが、SD95と重複してい

るため、実際にはもう少し長かった可能性がある。焚口から燃焼面にかけての掘り込みは浅く、床面とはほぼ同じである。燃焼面から煙道にかけては、SD95のレヴェルとも重なるが、緩やかな傾斜をもって立ち上がるものとみられる。袖は確認されなかったが、袖補強材の粘土ブロックの広がりを見ると、焚口の幅は0.30m前後と考えられる。

壁溝はカマドの付設された辺を除いて検出された。

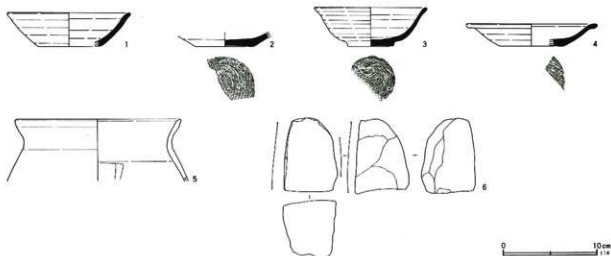


S J 55

- 1 暗褐色土 ローム粒子微量含む。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 3 明褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量含む。軟質。
- 5 明褐色土 ロームブロック多量含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 8 灰褐色土 灰褐色粘土粒子多量含む。

- 9 暗褐色土 ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック、炭化粒子多量、焼土粒子微量含む。
- 11 褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。
- 12 褐色土 ローム粒子多量含む。
- 13 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 14 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 15 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 16 明褐色土 ローム粒子少量含む。

第214図 第55号住居跡出土遺物



第55号住居跡出土遺物観察表 (第214図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	坏	(13.0)	3.6	(6.6)	BCK	A	灰色	10	南比企産	
2	坏			6.2	EKL	C	暗灰褐色	10	鉄分風付着物	
3	坏	12.0	4.1	4.9	BCDK	A	暗青灰色	60		
4	皿	(14.0)	2.4	(6.8)	BKL	C	灰色	10		
5	甕	(17.6)			K	A	淡橙褐色	15	内外面に炭化物付着	
6	砥石	長さ(7.8)×幅5.6×厚さ(6.0)cm、重量324.8g								

カマド周辺は床面が下がっていることや凹凸などもあり、壁溝の確認は困難であったことを原因としていられる。床面はカマド周辺を除くと平坦である。ピットは2基検出され、P1は住居跡に伴うとみられるが、P2は当初、SK1009に重複するため住居跡に伴うと考えていたが、西辺を壊していることや覆土の色調が異なることから他の遺構と判断した。

覆土はローム粒子やブロックが多く含み、焼土や炭化物は少なかった。

出土遺物 (第214図)

遺物はカマド、床面を中心に出土している。覆土の上層はSK1009とSD95と重なっていることもあり、出土遺物は少なかった。主な出土遺物には須恵器坏、皿、土師器甕などがある。

1～3は須恵器坏で、体部はやや内湾し、口縁部で緩やかに外反する。3の底部は高台風に仕上げられている。4は須恵器皿で、底部がやや厚く、口縁部で大きく外反する。1～4の底部は回転糸切りである須恵器はいずれも南比企産である。5は土師器甕の口縁部破片である。口縁部はいわゆる「コ」の字口縁であるがやや崩れている。

住居跡の年代は、出土遺物から9世紀後半と考えられる。

第56号住居跡 (第215図)

調査区の西、P-6グリッドに位置する。近世の遺構が密集する地域に位置するために、SD104・132、SK479・492・527、SB17などと重複して遺存状態は良くない。平面形態は長方形で、西辺の隅を除いて隅丸方形である。南側の長辺中央にはカマドが1基付設されていた。規模は長辺5.58m、短辺3.48m、深さ

0.22mとこの集落の中では大型に属する住居跡である。主軸方向はN-43°-Eである。

カマドは、ピットや攪乱等と重なっているために原形を留めていないが、残存する長さは0.73mである。主軸はやや南に振れ、軸は残存せず、焚口や燃焼面も残っている部分は少なかった。煙道付近では焼土や炭化物が僅かに確認できる程度である。貯蔵穴はカマドの右、南側隅で検出された。平面形態は不整形で、断面はやや深いレンズ状である。

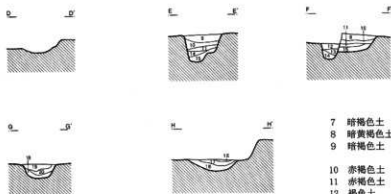
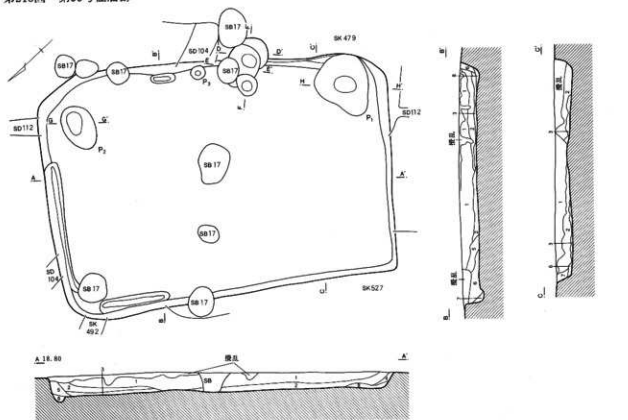
床面は全面にわたって貼り床が確認できたが、遺存状態は悪く、貼り床に使用されたロームブロックが浮いた状態で検出され、床全体が緩やかな凹凸になっていた。ピットは貯蔵穴の他に北東隅に1基検出されたが、掘り込みも浅く、柱穴かどうかは不明である。壁溝は北西隅付近とカマド周辺で検出されたが、壁溝の深さはいずれも5cm前後と床面との差が殆どないため、あるいは調査を進めていく過程で壁溝を掘りぬいてしまった可能性も考えられる。

出土遺物 (第216図)

攪乱や後世の遺構と重なっているため、出土遺物は少なかった。遺物出土位置は覆土中が主体であるが、一部壁溝内や床面からも出土している。小破片が多く、完形品はなかった。

1は須恵器高台付埴である。体部は緩やかに内湾し、口縁部で外反する。底部は回転糸切り後、高台を貼りつけている。器は厚く、表面に鉄分の付着が目立つ。2・3は酸化窑焼成の高台付埴である。製作技法は須恵器高台付埴と同じで、底部も回転糸切り後に高台を貼りつけている。4は土師器甕の口縁部破片である。口縁部は「コ」の字口縁である。

第215図 第56号住居跡

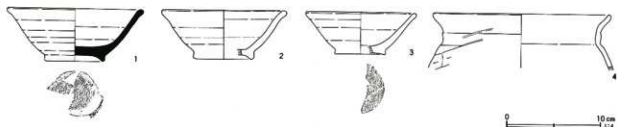


- S J 5 6
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量、焼土粒子多量含む。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化粒子少量含む。
 - 3 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。
 - 4 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 - 5 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
 - 6 褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。

- 7 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
- 8 暗黄褐色土 ローム粒子多量含む。
- 9 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子少量、灰褐色粘土粒子多量含む。
- 10 赤褐色土 焼土粒子多量、炭化粒子少量含む。
- 11 赤褐色土 焼土ブロック多量含む。
- 12 褐色土 ローム粒子、焼土粒子少量含む。
- 13 褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック、焼土粒子少量含む。
- 14 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 15 赤褐色土 焼土多量含む。
- 16 暗褐色土 ローム粒子微量、焼土粒子多量含む。
- 17 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 18 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 19 黒褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量含む。
- 20 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。

第56号住居跡出土遺物観察表 (第216図)

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率	備	考
1	高台付碗	(14.6)	5.5	(6.4)	BK	A	黒褐色	50		
2	高台付碗	(13.4)	5.2	(6.4)	BCKL	C	淡赤褐色	40	器面風化著しい。	酸化焙焼成
3	高台付碗	(11.8)	4.4	(5.4)	K	A	淡橙褐色	40		酸化焙焼成
4	葉	19.0			K	A	淡茶褐色	25		



第56号住居跡 (第218図)

調査区の西、Q-4グリッドに位置する。SK552の上に構築されているが、他の遺構との重複関係は認められない。しかし、遺構検出面には全体に攪乱が入っており、壁面やカマドにはそのために、部分的に影響を受けている。平面形態は長方形で、北辺右寄りにカマドが1基付設されていた。規模は長辺3.44m、短辺2.80m、深さ0.24mである。主軸方向はN-45°-Eである。

カマドは北壁中央東寄りであるが、その残存長は0.68mである。袖は既に崩壊し、確認できなかったが、左袖の一部とみられる部分には灰色粘土がブロック状に確認できた。焚口から燃焼面にかけては平坦で、床面と同一レベルにある。煙道は、確認できた断面からは急角度で立ち上がった後、平坦になり、実際には1m余りの長さがあったものと考えられる。また、燃焼面には直径10cm、深さ5cm余りのピットが2基あり、奥の1基については支脚を添えた際のピットの可能性も考えられる。一方、その左側にカマドのような形態の小規模な張り出しが検出された。覆土中には、焼土や炭化粒子が混入している。遺構確認時には、本来のカマドの部分に焼土や炭化物が集中していたため考慮

しなかったが、当初はここにカマドを設定し、何かの事情で右側に変更したことも考えられる。焼土等は住居跡が廃棄または埋没していく過程で混入したものと考えられる。

床面は全面に深さ数cmの掘り込みをもつ貼り床が確認された。床面の下からは長径2.05m、短径1.75mの不整円形の土壌が検出された。当初は貼り床の一部と考えたが、形状がはっきりしており、床下土壌と判断した。出土遺物はなく、覆土はローム粒子を主体であった。ピットは1基検出され、柱穴の可能性も考えられるが、位置がやや不自然である。また、貯蔵穴とみられるピットは検出されなかった。壁溝は南辺から西辺にかけて検出されたが、カマド周辺では確認することはできず、全周しないものと考えられる。

出土遺物 (第217図)

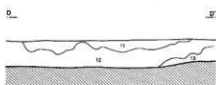
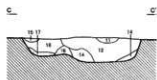
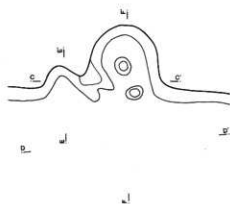
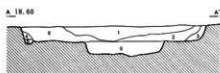
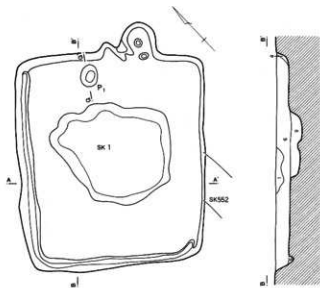
出土遺物は少なく、僅かにカマドと南側の床面から出土している。1は須恵器杯、2は須恵器高台付碗、3は須恵器皿の底部破片である。4は土師器甕の口縁部破片である。

住居跡の年代は、出土遺物から9世紀後半から10世紀初め頃と考えられる。

第217図 第58号住居跡出土遺物



第218図 第58号住居跡・カマド



SJ58

- | | |
|---------|---------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子、炭化物少量含む。 |
| 2 明褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子微量含む。軟質。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 5 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒子多量、焼土粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 7 明褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 8 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量、炭化物多量含む。 |
| 9 暗黄褐色土 | ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。 |

カマド

- | | |
|---------|-----------------------------|
| 10 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 11 黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 12 黄褐色土 | ローム粒子、焼土粒子少量含む。 |
| 13 褐色土 | ローム粒子、褐色ブロック少量含む。 |
| 14 暗褐色土 | ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。 |
| 15 灰褐色土 | 灰褐色粒子多量含む。 |
| 16 暗褐色土 | ローム粒子少量、焼土粒子多量含む。 |
| 17 褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 18 暗褐色土 | ローム粒子、灰色粘土ブロック、ロームブロック多量含む。 |
| 19 暗褐色土 | ローム粒子、焼土粒子少量含む。 |



第58号住居跡出土遺物観察表 (第217図)

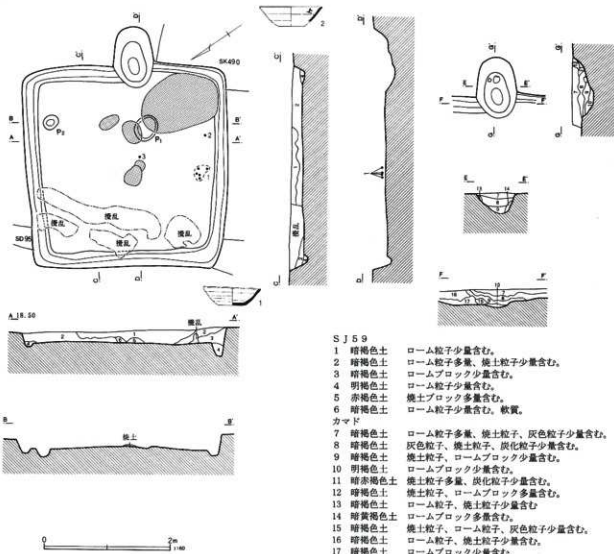
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.8)	3.9	(4.8)	BCK	A	青灰色	10	南比企産
2	高台付埴			(5.6)	BKL	C	茶褐色	10	高台欠 末野産
3	皿	(6.6)	KL	C	灰色	10			
4	甕	(17.4)			BEK	A	淡橙褐色	10	

第59号住居跡 (第219図)

調査区の西、Q-6グリッドに位置している。北西部をSD95及び撓乱に、南東側をSK490等と重複している。平面形態はほぼ正方形で、カマドは東壁中央に付設されていた。規模は長辺3.20m、短辺2.90m、深さ0.16mである。主轴方向はN-62°-Wである。

カマドはS J 58と同様小型である。袖は残存していない。焚口の幅は約40cmと推定され、壁溝は掘形に接している。焚口から燃焼面へかけては15cm余りの掘り込みがあることから、カマドは堅穴を掘り、壁溝を全周させた後に構築されたものとみられる。燃焼面は床面より僅かに窪んでいるが、広い範囲に焼上面が確認

第219図 第59号住居跡・カマド



S J 59

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 4 明褐色土 ローム粒子少量含む。
- 5 赤褐色土 焼土ブロック多量含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量含む。軟質。

カマド

- 7 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子、灰色粒子少量含む。
- 8 暗褐色土 灰色粒子、焼土粒子、炭化粒子少量含む。
- 9 暗褐色土 焼土粒子、ロームブロック少量含む。
- 10 明褐色土 ロームブロック少量含む。
- 11 暗赤褐色土 焼土粒子多量、炭化粒子少量含む。
- 12 暗褐色土 焼土粒子、ロームブロック多量含む。
- 13 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子少量含む。
- 14 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 15 暗褐色土 焼土粒子、ローム粒子、灰色粒子少量含む。
- 16 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子少量含む。
- 17 暗褐色土 ロームブロック少量含む。

できた。煙道は検出状況から、急角度で立ち上がるものとみられる。

床面は平坦で、中央部や壁際などに部分的ではあるが、貼り床が検出された。ピットは2基検出され、P1は長径44cm、短径34cm、深さ3cmで、全面に焼土がみられ、錆びた鉄の断片と砂が検出された。P1は焼土の状況から、炉跡であった可能性が強く、出土した鉄製品から、小鍛冶を行なった可能性が高い。

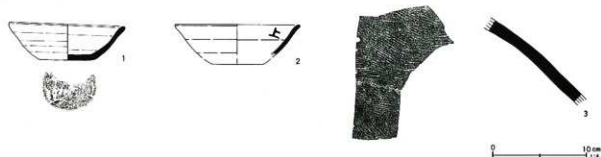
壁溝は全周し、カマド周辺は深さ約10cm、反対側では約20cmとなっているが、特に外部へ排水するような

施設は検出されなかった。

出土遺物 (第220図)

遺物は、カマド及び西側の床面から少量出土している。カマド内には楕円形の川原石を支脚として使用していた。1と2は須恵器坏で、底部は回転糸切りである。2は口縁部に「上」の墨書がある。3は須恵器甕の肩部破片で、外面は細かい平行引きが施される。この他には土師器甕の小破片が少量出土している。住居跡の年代は、出土遺物から9世紀後半と考えられる。

第220図 第59号住居跡出土遺物



第59号住居跡出土遺物観察表 (第220図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.4	4.0	5.9	BCKL	C	灰色	90	
2	坏	(13.4)			BCK	C	淡黒褐色	20	南比企産 墨書「上」
3	甕				BKL	A	黒褐色	10	輪積痕不明

第60号住居跡 (第221図)

調査区の西、R-6グリッドに位置する。平面形態は南北方向に長い長方形である。規模は長辺3.60m、短辺2.72m、深さ0.22mである。主軸方向はN-55°-Eである。

カマドは東壁右寄りに1基付設され、主軸はやや東に振れている。袖は右袖が残っていたが、左袖はまったく残っていなかった。袖は灰色粘土とロームブロック、芯に土師器甕の破片を用いて構築している。焚口から燃焼面にかけては床面より数cm掘り込まれ、レンズ状になっているが、煙道付近では天井や側壁などの崩落によって層が一定していない。また、焚口付近に

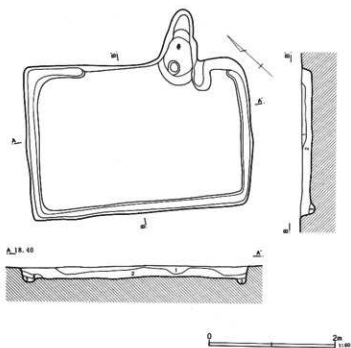
は直径約20cmの浅いピット、燃焼面中央には直径約5cmの浅いピットが検出された。

床面はほぼ平坦で、南側半分を中心に貼り床が確認された。壁溝は深さ約7cmと浅く、カマドの左側約1mを除いて全周する。貯蔵穴、柱穴等のピットは検出されなかった。

出土遺物 (第222図)

遺物は少なく、床面、壁溝内を中心に出土している。1・2は須恵器坏で、口径約12.5cm、底径6cm前後である。底部が厚く、口縁部端部で外反する。2は体部に「万」の墨書が入る。3は酸化焰焼成の坏で、底部は回転糸切りである。4は「コ」の字口縁の土師器台

第221図 第60号住居跡・カマド・遺物分布図

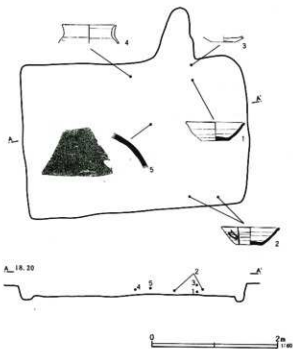
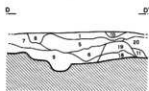
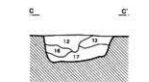
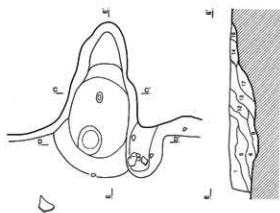


SJ 60

- 1 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子、灰褐色ブロック少量含む。軟質。
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック、黒褐色ブロック少量含む。

カマド

- 5 暗灰褐色土 焼土粒子、炭化粒子、灰褐色ブロック少量含む。
- 6 暗褐色土 灰色粒子、焼土粒子少量含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子、炭化粒子、焼土ブロック少量含む。
- 8 黒褐色土 焼土粒子微量含む。
- 9 暗褐色土 灰色粒子、焼土粒子、ローム粒子多量含む。
- 10 暗褐色土 焼土粒子微量含む。
- 11 暗褐色土 焼土粒子、ローム粒子少量含む。軟質。
- 12 黒褐色土 焼土粒子多量含む。軟質。
- 13 褐色土 焼土粒子多量含む。
- 14 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 15 明褐色土 焼土粒子少量含む。
- 16 黒褐色土 焼土粒子、ローム粒子少量含む。
- 17 褐色土 焼土粒子少量含む。軟質。
- 18 暗褐色土 焼土粒子少量含む。
- 19 暗灰褐色土 焼土粒子、炭化粒子少量含む。
- 20 暗褐色土 焼土粒子多量含む。

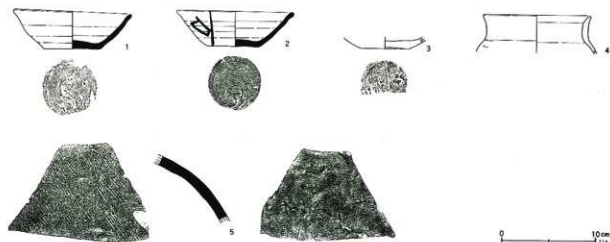


付甕の口縁部破片である。5は須恵器甕胴部の破片で、外面は細かい平行叩き、内面は同心円状の当て具の痕跡が残る。須恵器はいずれも南比企産である。この他の遺物には土師器甕、台付甕の小破片が数点出土して

いる。

住居跡の年代は出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

第222図 第60号住居跡出土遺物



第60号住居跡出土遺物観察表 (第222図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.6	3.9	6.0	BCK	A	青灰色	80	
2	坏	12.5	3.7	5.7	BKL	A	淡灰黄色	95	墨書「万」
3	坏			5.7	BKL	C	淡黒褐色	50	融化熔焼成
4	台付甕	(11.4)			K	A	淡暗赤褐色	20	
5	甕				BKL	A	灰色	10	

第61号住居跡 (第224図)

調査区の西、S・T-7グリッドに位置している。北側の一部を後世の溝跡SD99や大小のピットと重複している。平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺4.50m、短辺2.78m、深さ0.14mである。主軸方向はN-63°-Eである。

カマドは東辺に2基検出された。当初はカマドaだけ検出されたが、調査を進める過程で壁面に焼土が確認できたため、カマド(カマドb)と判断した。カマドは検出状況からカマドbが古く、カマドaが新しいと判断した。

カマドaは長さ(推定)1.65mで、主軸は北東方向に振れている。P1は当初カマドaの掘形と考えたが、カマドaの主軸に対してやや北側に振れていることや

掘り込みの深さ、形状が不自然である。確認時において、P1の上には多量の遺物があつたため、通常のカマドの焚口が検出できなかったこともあるが、断面の観察などから一度掘形を掘り、カマドの焚口・燃焼面として一部を使用した後、再度規模を縮小してカマドの主軸方向に合わせて構築し直したものと考えられる。燃焼面から煙道にかけての覆土中には、灰色粘土ブロックが多く混入しており、粘土を貼った天井や側壁が崩落したことを窺わせる。カマド内には炭化物は少なかった。

カマドbはカマドaの左側1m程の位置に付設されている。袖はカマドa構築時に壊されているため、存在しない。残存する長さは約50cmであるが、カマドaに比べやや小規模で、燃焼面の奥はレンズ状の浅い

ピットになっている。覆土中には焼土やカマドa構築時の埋土とみられるロームブロックはみられたが、炭化物は殆ど確認できなかった。

P1はカマドaの、掘形を一部切り込んで構築されている。覆土には約5cmにわたって焼土がレンズ状に堆積しており、下層のローム面は焼けた状態になっている。焼土中には鉄製品などは検出できなかったが、周辺の住居との関連性を考慮すると、小鍛冶炉の可能性も十分考えられる。

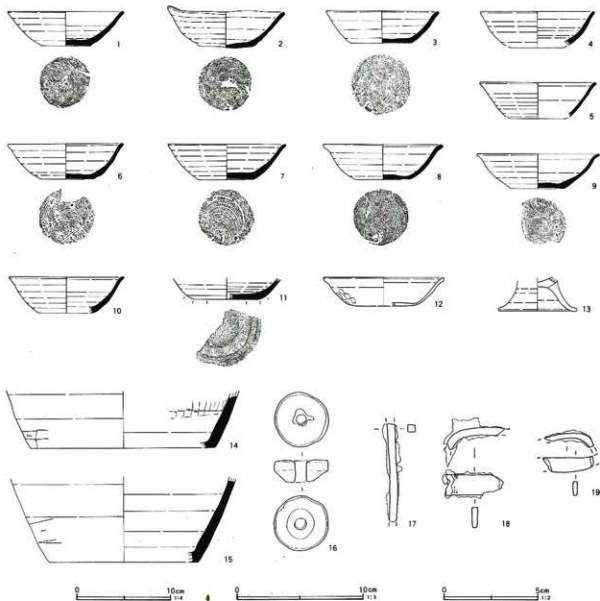
床面は平坦で、中央部付近の貼り床を確認できた。

壁溝は全周するが、カマドaは、掘形にかかって不自然であり、カマドを中心として何度かの改修が行われたものとみられる。他には貯蔵穴、柱穴等のピットは検出されなかった。

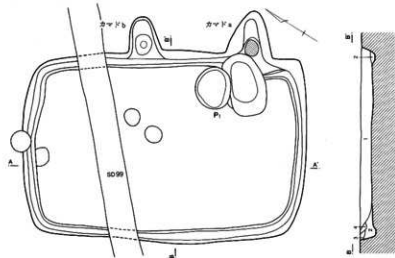
出土遺物 (第223図)

遺物は、カマド及びカマド周辺の床面を中心に出土している。主な出土遺物には須恵器杯、甕、土師器杯、台付甕、紡錘車などがある。1～11は須恵器杯である。口径は約13cm、底径は約6cmで、体部が緩やかに内湾し、口縁部で外反するものである。底部は14を除いて

第223図 第61号住居跡出土遺物

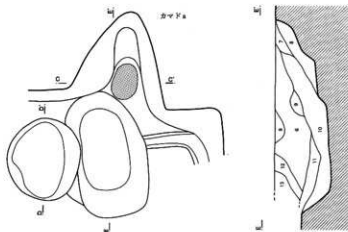


第224図 第61号住居跡・カマド



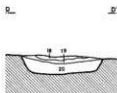
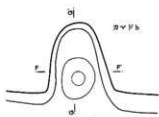
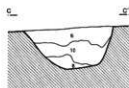
SJ61

- | | |
|--------|------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 2 明褐色土 | ローム粒子、ロームブ
ロック多量含む。 |
| 3 明褐色土 | ローム粒子多量含む。
軟質。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子微量含む。
軟質。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子、炭化粒子
多量含む。 |



カマド

- | | |
|----------|-----------------------------------|
| 6 暗褐色土 | ローム粒子多量、焼土粒子、炭
化物、ロームブロック少量含む。 |
| 7 暗黄褐色土 | 焼土粒子、ロームブロック少量
含む。 |
| 8 暗褐色土 | ローム粒子、灰色粒子少量含む。 |
| 9 暗褐色土 | ローム粒子少量、灰色粒子
多量含む。 |
| 10 暗褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック多量含む。 |
| 11 暗黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック、
焼土ブロック少量含む。 |
| 12 灰褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 13 暗褐色土 | ローム粒子、焼土粒子少量含む。 |
| 14 暗褐色土 | 焼土粒子、ローム粒子少量含む。 |
| 15 暗赤褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック多量、
ローム粒子少量含む。 |
| 16 暗褐色土 | 焼土粒子少量含む。 |
| 17 明褐色土 | 焼土粒子少量含む。 |
| 18 暗赤褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック多量
含む。 |
| 19 赤褐色土 | 焼土層。 |
| 20 黄褐色土 | ローム塊。 |



回転系切りである。11は回転系切り後、底部外周及び
 体部下端を回転ヘラ削りするもので、混入品と考えら
 れる。12は土師器環の破片で、推定口径約12.8cmであ
 る。底部は手持ちでヘラケズリされ、体部は横ナデし
 た後に形を整えるための指押さえが確認できる。16は
 土師器台付甕の脚部破片である。14と15は須恵器広口

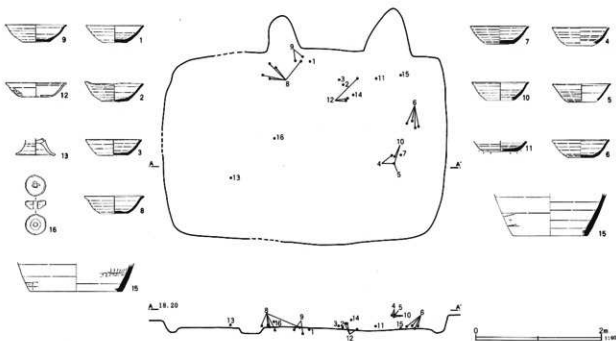
壺の胴部下半の破片で、底部付近は幅約3cmにわたつ
 てヘラケズリされている。須恵器類は大半が南北比産
 である。

住居跡の年代は出土遺物から、9世紀後半と考えら
 れる。

第61号住居跡出土遺物観察表 (第223図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	環	(12.3)	3.7	5.4	BCGKL	A	淡橙褐色	75		
2	環	12.9	4.1	5.6	BDKL	A	暗灰色	100		
3	環	12.0	3.4	6.4	BCKL	A	淡青灰色	100		
4	環	(12.2)			BCKL	A	暗橙褐色	30		
5	環	(12.6)			CKL	A	暗灰色	40		
6	環	12.4	3.8	6.0	HK	C	橙褐色	90	底部糸の抜き痕跡あり	
7	環	12.6	3.8	6.0	CKL	C	暗灰色	98	火ダスキ内外面に有	
8	環	12.7	3.7	5.8	BCKL	A	淡灰褐色	90		
9	環	(13.0)	3.6	(5.8)	CKL	A	灰色	40	内面に炭化物付着	
10	環	(12.2)	3.8	(5.6)	BCKL	A	灰色	50	口縁付近に炭化物付着跡 内外面火だすき	
11	環			7.0	BCKL	A	灰白色	20		
12	環	(13.0)	3.0	(7.0)	FK	A	橙褐色	40	土師器	
13	台付甕			(8.4)	EKL	A	茶褐色	10	脚部	
14	甕			(19.8)	DFKL	A	灰白色	5		
15	甕			(15.8)	BKL	A	灰色	10	内外面自然釉	
16	紡錘車	長径4.3×短径4.3×孔径0.9×厚さ1.7cm、重量28.9g								
17	鉄製品	長さ(5.1)×幅0.4×厚さ0.4cm、重量3.78g								不明
18	刀子	長さ(3.0)×幅1.1×厚さ0.3cm、重量5.05g								刀子茎? No19とおそらく同一個体
19	刀子	長さ(2.7)×幅0.7×厚さ0.25cm、重量1.89g								刀子茎?

第225図 第61号住居跡遺物分布図



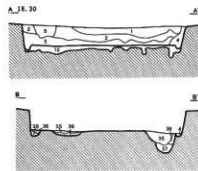
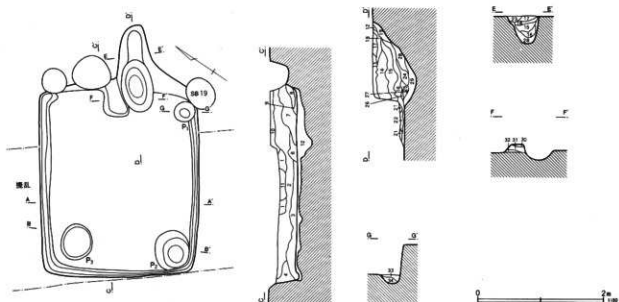
第62号住居跡 (第226図)

調査区の中央、やや西寄りのQ-8グリッドに位置している。平面形態は長方形で、カマドの周辺を掘立柱建物跡のピットに、中央部を攪乱に壊されている。規模は長辺3.20m、短辺2.40m、深さ0.32mと小型である。主軸方向は、N-55°-Eである。

カマドは、東辺の中央やや右寄りに1基付設されていた。残存する長さは1.36mである。袖は左側に確認

できたが、右側は殆ど残存していなかった。袖は灰色粘土、ロームブロックをベースに構築されているが、土師器甕などを芯にしたような痕跡は見られなかった。カマドの掘形は床面より約20cm掘り込んだ後、約10cmを埋め戻し、整えている。焚口は袖が明瞭に残っていないため、幅等は不明であるが、掘形から判断すると30cm弱とみられる。燃焼面は浅いレンズ状になっていて、床面より僅かに窪んでいる。煙道は約45°の傾

第226図 第62号住居跡



S J 6 2

- | | |
|---------|------------------------|
| 1 明褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 2 明褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 6 明褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 7 暗褐色土 | ロームブロック、灰色ブロック少量含む。 |
| 8 黄褐色土 | ローム塊。 |
| 9 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 10 暗褐色土 | ローム粒子、灰色粒子、灰色ブロック少量含む。 |
| 11 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 |

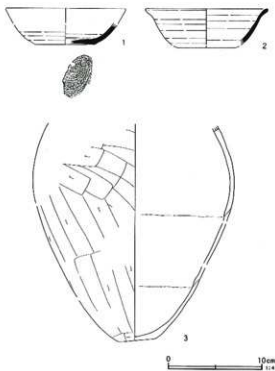
- | | |
|----------|-------------------------------|
| 12 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 13 暗灰褐色土 | 灰色ブロック、ロームブロック少量含む。 |
| 14 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 15 暗褐色土 | ローム粒子、焼土粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 16 暗赤褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック多量含む。 |
| 17 赤褐色土 | 焼土ブロック多量含む。 |
| 18 赤褐色土 | 焼土粒子多量、灰色粒子少量含む。 |
| 19 褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 20 灰褐色土 | 灰色粒子少量含む。 |
| 21 暗黄褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 22 暗灰褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 23 暗褐色土 | ローム粒子、焼土粒子少量含む。 |
| 24 明褐色土 | ローム粒子多量、焼土粒子少量含む。 |
| 25 明褐色土 | ローム粒子多量、焼土粒子少量含む。 |
| 26 赤褐色土 | 焼土粒子、ローム粒子多量、炭化粒子少量含む。 |
| 27 黄褐色土 | 焼土粒子少量、ロームブロック多量含む。 |
| 28 黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 29 明褐色土 | ローム粒子、ロームブロック、炭化物、焼土ブロック少量含む。 |
| 30 灰褐色土 | 灰色粘土粒子、灰色粘土ブロック多量含む。 |
| 31 暗褐色土 | ローム粒子多量、焼土粒子、炭化粒子少量含む。 |
| 32 黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 33 黒褐色土 | ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子少量含む。 |
| 34 暗黄褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 35 黒褐色土 | ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。 |
| 36 暗黄褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 37 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。 |

斜がある。

ピットは3基検出された。いずれも北側隅を除く隅に位置している。P1は貯蔵穴の可能性はあるが、大きさと形状など不自然である。P2・P3については、土層を観察するかがり、貯蔵穴や柱穴の可能性は少ない。壁溝はカマドの辺を除いて全周し、北側に比べて、南側がやや深くなっている。貼り床は床面全域に及んでいるが、特にカマド周辺は深く掘り込まれている。

出土遺物 (第227図)

第227図 第62号住居跡出土遺物

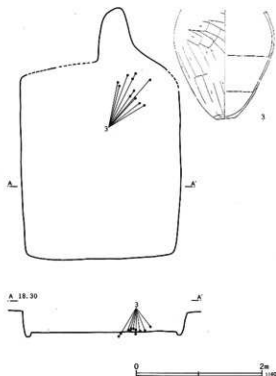


遺物はカマド周辺床面及び覆土から出土している。住居に伴う遺物は須恵器や土師器類であるが、縄文土器も少量出土しており、付近に土壌などがあつたものとみられる。

1と2は須恵器環の破片である。口縁部は緩やかに外反し、底部は回転糸切りである。3は土師器甕で、口縁部を欠く。胴部は輪積の痕跡が明瞭である。

住居跡の年代は出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

第228図 第62号住居跡遺物分布図



第62号住居跡出土遺物観察表 (第227図)

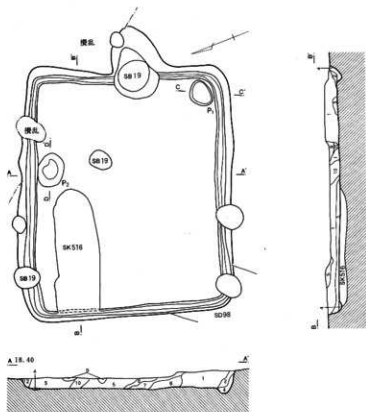
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環			(6.4)	DKL	A	青灰色	20	
2	環	(13.0)			GKL	A	暗灰色	30	
3	甕		3.9		EKL	A	淡赤褐色	30	

第63号住居跡 (第229図)

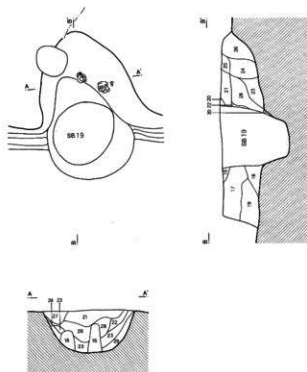
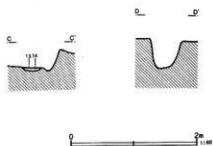
調査区の西側中央、Q-8グリッドに位置する。S J 62の南、約5mに隣接している。住居跡は西側をS D 98、北側をS B 19などと重複している。平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺3.99m、短辺3.26m、深さ

0.20mである。主軸方向はN-81-Eと東寄りに構築されている。

カマドは短辺中央、やや右よりに1基付設されていた。煙道及び燃焼面中央を擾乱や掘立柱建物跡のピットと重複しているため、原形を留めていない部分があ



- Sj 63
- | | |
|----------|-----------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子微量含む。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。軟質。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。軟質。 |
| 4 明褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 5 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 6 黄褐色土 | ローム塊。 |
| 7 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 8 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 9 暗灰褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 10 暗灰褐色土 | 灰色ブロック多量含む。 |
| 11 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 12 暗灰褐色土 | 灰色ブロック、焼土ブロック多量含む。 |
| 13 黒褐色土 | 炭化粒子多量含む。 |
| 14 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |



- カマド
- | | |
|----------|-------------------------------|
| 15 暗灰褐色土 | 暗灰色ブロック多量含む。 |
| 16 黄褐色土 | ローム塊。 |
| 17 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 18 暗褐色土 | ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子、灰色ブロック少量含む。 |
| 19 暗褐色土 | 焼土粒子少量含む。 |
| 20 暗褐色土 | ローム粒子、焼土粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 21 暗灰褐色土 | 焼土粒子、灰色粒子、灰色ブロック少量含む。 |
| 22 赤褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック多量、灰色粒子、ローム粒子少量含む。 |
| 23 暗赤褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック少量含む。 |
| 24 暗灰褐色土 | ローム粒子、暗灰色ブロック少量含む。 |
| 25 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 26 明褐色土 | ローム粒子、焼土粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 27 黒褐色土 | 焼土粒子、灰色粒子少量含む。 |
| 28 暗褐色土 | ローム粒子、焼土粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 29 暗灰褐色土 | 焼土粒子、ローム粒子少量含む。 |
| 30 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |



る。残存するカマドの長さは1.16mである。袖は確認できなかったが、掘形から推定すると、50cm弱とみられる。焚口から燃焼面にかけては、平坦で殆ど掘り込みがなく、床面と同一レベルにある。煙道は約45°の角度で立ち上がる。燃焼面中央には土製の支脚が2基数cm埋め込まれた状態で検出された。いずれも下半部の破片で、断面の観察から、上半分は攪乱によって壊された可能性が高い。

貯蔵穴（P1）はカマドの右、南東コーナーで検出された。平面形態は長径約40cm、深さ5～6cmの楕円形で、確認面は炭化物で覆われていた。

床面は平坦で、貼り床は検出されなかった。壁溝は全周し、カマドの袖があったと想定される位置まで及んでおり、カマドの構築以前に壁溝が掘られていたことが明らかになった。なお、SK516は住居には伴わ

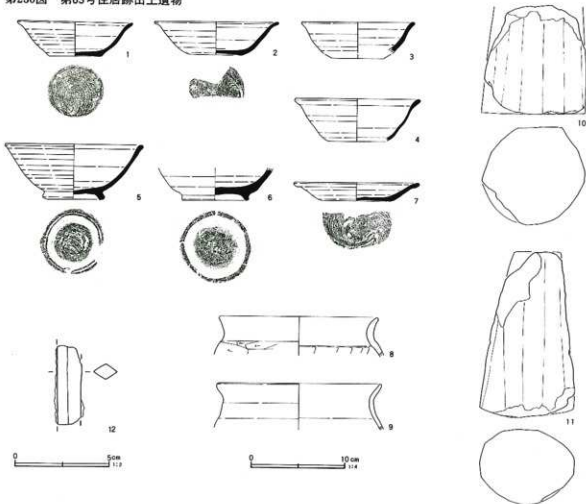
い。

出土遺物（第230図）

遺物は覆土を中心に、カマド、床面、壁溝から出土している。主な出土遺物には須恵器杯、皿、高台付碗、土師器甕などがある。1～4は須恵器杯で、口径12～13cm、口縁端部が大きく外反する。7は須恵器皿で、底径が大きい。5・6は須恵器高台付碗である。口径15cm前後、底径7～8cmである。杯類に比べて口縁端部の外反は緩やかである。8・9は土師器甕の口縁部破片である。口縁部は「く」の字口縁で、胴部上半は横へラケズリされる。10・11は土製支脚で、基部を欠く。12は断面菱形の不明鉄製品である。

住居跡の年代は出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

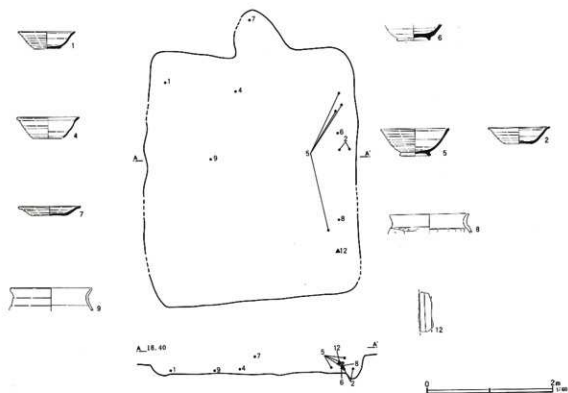
第230図 第63号住居跡出土遺物



第63号住居跡出土遺物観察表 (第230図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	坏	12.2	3.8	5.6	DKL	A	灰色	75	口縁部炭化物付着 外面ヘラケズリ **	
2	坏	(13.2)	3.5	5.7	BCL	A	茶褐色	40		
3	坏	(12.0)			BFKL	A	橙褐色	10		
4	坏	(13.4)			BKL	A	灰色	30		
5	高台付埴	14.6	5.8	(5.6)	BFKL	C	灰色	50		
6	高台付埴			7.2	FGKL	A	灰色	20		
7	甕	13.4	2.2	7.4	BKL	A	暗灰色	50		
8	甕	(17.0)			BKL	A	赤褐色	25		
9	甕	(17.4)			BKL	A	茶褐色	10		
10	支脚	長さ(11.6)×幅10.9×厚さ10.2cm								
11	支脚	長さ(17.6)×幅10.0×厚さ8.0cm								
12	鉄製品	長さ(4.0)×幅1.25×厚さ0.8cm、重量15.91g								

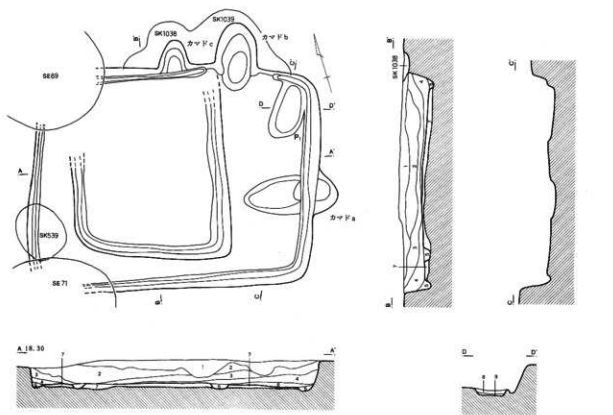
第231図 第63号住居跡遺物分布図



第64号住居跡 (第232・233図)

調査区の南西、0-10グリッドに位置している。住居跡は西辺を擾乱(試掘溝)、SE 69・71に、カマドはSK1038・1039等と重複し、遺存状態は良くない。平面形態は長方形である。規模は大型の住居で長辺4.03m、短辺3.34m、深さ0.37mである。主軸方向はN-23°-Eである。

カマドは3基検出されたが、貼り床を調査していく過程で、この住居跡が2軒の重複であることが明らかになった。住居跡は北辺が共通していることから、小型の住居から大型の住居への拡張が行われたものと考えられる。カマドa・bは大型の住居(新)、カマドc(古)は小型の住居に帰属するものとみられる。大型の住居は、東辺中央にカマドaを構築した後、



SJ64

- | | | |
|---|-------|--------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒子、暗褐色ブロック少量含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量、焼土粒子、炭化粒子少量含む。 |
| 4 | 暗黄褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子少量、ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 5 | 黄褐色土 | ロームブロック多量、暗褐色ブロック少量含む。 |

- | | | |
|---|-------|------------------------------|
| 6 | 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 7 | 暗黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。(掘形) |
| 8 | 黒褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 9 | 暗黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |

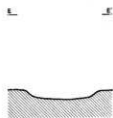
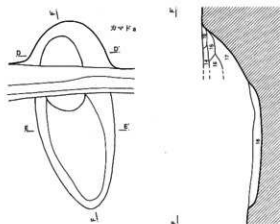
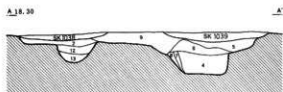
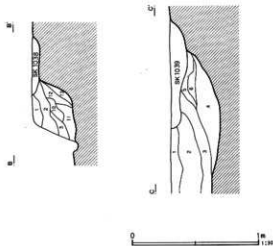
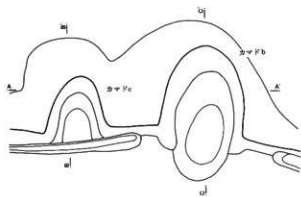
aを壊してカマドbを北辺右寄りに構築する。貯蔵穴(P1)はカマドb右よりに1箇所検出されたが、カマドa右寄りには検出されなかった。カマド内の焼土や炭化物の状況から判断すると、カマドaはbに比べて量的に少ないことから、使用期間が短かった可能性がある。また、カマドbは擾乱等の影響もあり、袖は殆ど確認することができなかった。

残存長はカマドa1.50m、カマドb1.05mと、残存する掘形をみるとaからbへ縮小化しているが、燃焼面から煙道の作りかた(傾斜角度、煙道部の長さ)は基本的に同じである。カマドbの袖は灰色粘土、ロームブロック、黒褐色土を用い、特に壁際に粘土を多く使用していた痕跡が認められる。断面の観察からは天

井が崩落して埋没したような状況はなく、次第に埋没していった可能性が高い。

床面は平坦で、ほぼ全面にわたって貼り床が確認できた。カマドaもカマドb構築時の床面を検出した際には確認できず、掘形を確認する過程で検出した。また、貯蔵穴は平面形態は長楕円形であるが、貼り床が周囲まで及んでいることを考慮すると、長方形の可能性も考えられる。長径0.91m、短径0.48m、深さ0.11mで、表面は焼土と炭化物で覆われていたが、周囲には焼土や炭化物は少ないことから、火災ではなくカマドの灰などとともに入混したものと考えられる。壁溝は擾乱等と重複しているが、全周するものとみられる。柱穴等については検出されなかった。

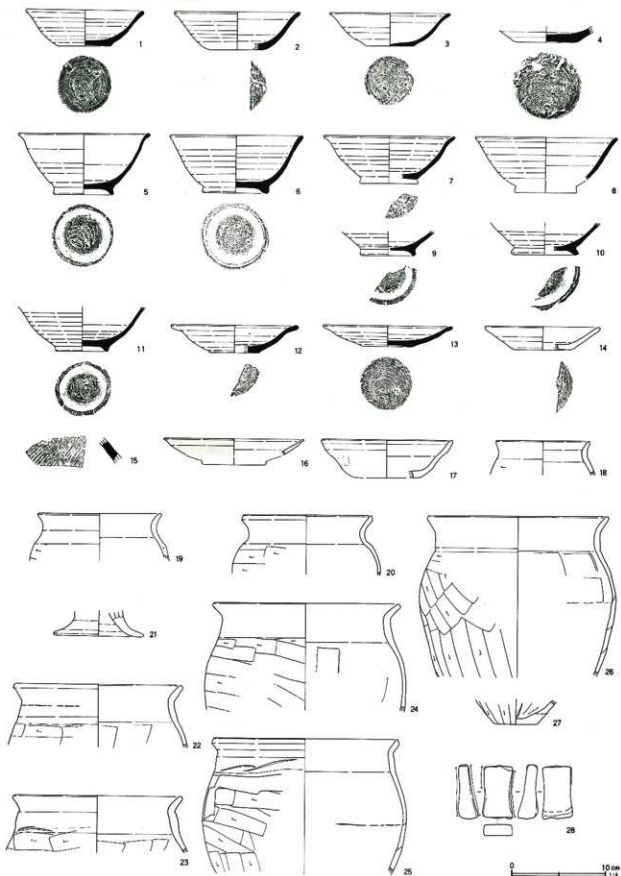
第233図 第64号住居跡カマド



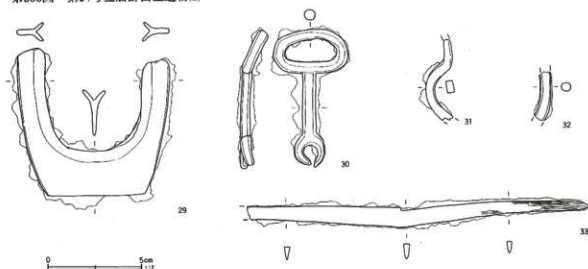
S J 6 4 カマド a・b・c

- 1 黒褐色土 ローム粒子、暗褐色ブロック少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量、焼土粒子、炭化粒子少量含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子、ローム粒子、灰褐色粒子少量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子少量含む。
- 6 灰褐色土 ローム粒子少量、灰褐色ブロック、焼土粒子、炭化粒子多量含む。
- 7 赤褐色土 焼土ブロック多量、暗褐色ブロック多量含む。
- 8 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。
- 9 暗褐色土 ローム粒子、黒褐色ブロック多量含む。
- 10 灰褐色土 焼土粒子、炭化粒子、灰色ブロック、暗褐色ブロック多量含む。
- 11 暗灰褐色土 灰色ブロック少量、焼土粒子、炭化粒子少量含む。
- 12 灰褐色土 灰色ブロック多量、焼土粒子、炭化粒子少量含む、粘性あり。
- 13 黒褐色土 攪乱。
- 14 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子、黒褐色ブロック少量含む。
- 15 暗黄褐色土 ローム粒子少量含む。
- 16 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子少量、ローム粒子、黒褐色ブロック多量含む。
- 17 暗赤褐色土 焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子多量、ロームブロック、暗褐色ブロック少量含む。
- 18 暗黄褐色土 ローム粒子多量含む。
- 19 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量含む。(順形)

第234图 第64号住居跡出土遺物(1)



第235図 第64号住居跡出土遺物(2)



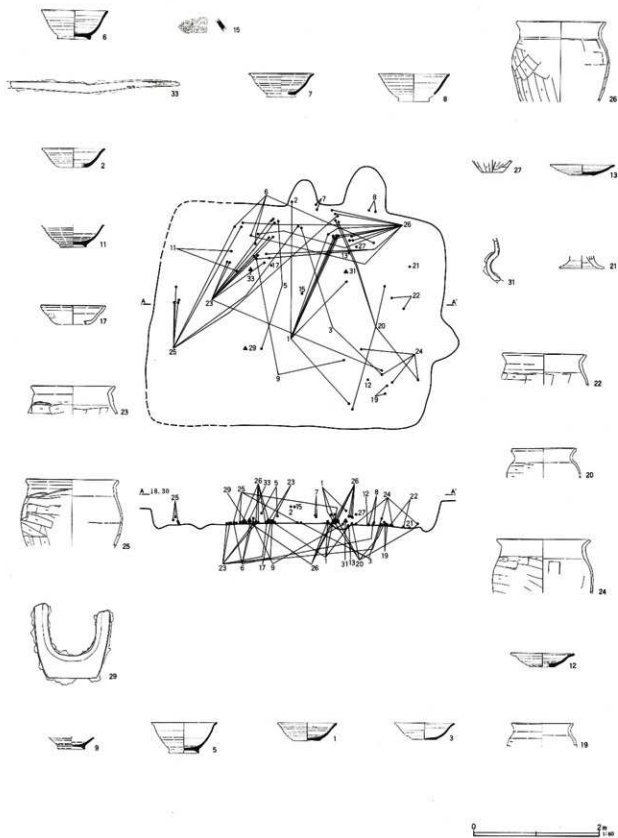
第64号住居跡出土遺物観察表 (第234・235図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.6	3.9	5.6	BKL	A	暗灰色	70	
2	坏	(13.4)	4.0	(5.6)	DGKL	A	暗灰色	40	
3	坏	(12.8)	3.5	5.2	BGKL	C	灰色	70	
4	坏			(7.2)	BKL	A	淡橙褐色	10	外面わずかに炭化物付着
5	高台付埴	(14.0)	6.5	6.5	BKIL	C	灰白色	60	内外面に炭化物付着 表面風化著しい
6	高台付埴	14.2	6.2	7.1	BDGKL	A	暗灰色	70	
7	高台付埴	14.0		(6.0)	BDGKL	A	灰色	20	
8	高台付埴	(15.2)			ACHKL	C	灰色	35	鉄分付着
9	高台付埴			(6.0)	BKL	A	暗灰色	20	
10	高台付埴			(7.2)	BKL	A	淡橙褐色	20	
11	高台付埴			5.6	BFKL	A	灰色	30	重ね焼の痕跡
12	皿	1.6	2.9	(5.6)	BDKL	A	灰色	40	
13	皿	(13.8)	2.2	5.5	BKL	A	暗灰色	65	内面炭化物付着
14	皿	(12.2)	2.4	(6.0)	BFKL	C	暗灰褐色	20	酸化焙焼成
15	甕				BGKL	A	暗灰色	10	平行叩き
16	皿	(15.0)			BKL	A	灰白色	10	灰釉
17	坏	(14.0)	4.0	(7.0)	BFGKL	A	淡橙褐色	10	土師器
18	台付甕	(10.0)			K	A	淡暗褐色	20	
19	台付甕	(13.0)			KL	A	淡橙褐色	10	
20	台付甕	14.0			K	C	暗褐色	20	
21	台付甕			(9.6)	BFKL	A	橙褐色	70	うるし付着? (脚部)
22	甕	(18.0)			EK	A	灰褐色	10	
23	甕	(18.0)			EK	A	赤褐色	40	
24	甕	(20.0)			EK	A	淡橙褐色	30	
25	甕	20.0			EK	A	赤褐色	20	
26	甕	19.2			EKL	A	暗赤褐色	60	
27	甕			4.8	EK	A	黒褐色	50	
28	砥石	長さ6.2×幅3.3×厚さ2.2cm、重量46.9g							
29	鋸先	長さ(7.75)×幅3.0×刃幅5.2cm、重量57.67g							ミニチュアの模造品の可能性あり
30	馬具轡	長さ7.2×幅0.7×厚さ0.5cm、重量22.18g							引手差
31	鉄製品	長さ(4.2)×幅0.65×厚さ0.4cm、重量6.68g							不明
32	鉄製品	長さ(2.5)×幅0.5×厚さ0.4cm、重量2.18g							丸棒状
33	刀子	長さ(18.0)×身幅1.0×棟幅0.3cm、重量17.08g							

小型の住居は大型の住居構築にあたって、小型の住居の床面まで掘り込みが及んでいるため、カマドと壁

溝の一部を除いて原形を留めていない。平面形態は長方形とみられ、カマドcは大型の住居と共通する北辺

第236图 第64号住居跡遺物分布图



右寄りに付設される。規模は長辺2.95m、短辺2.45mである。カマドの焚口は大型の住居の壁溝や貼り床によって範囲はわからないが、カマド自体が小振りであるため、大型の住居の壁溝にかかる程度とみられる。燃焼面は浅く、細長いレンズ状である。覆土の上層は大型の住居と共通しており、大型の住居構築時にすべてを埋め戻さず、棚等に利用した可能性も考えられる。覆土下層は灰色粘土、ロームブロック、暗褐色ブロックの層がみられ、人為的に埋め戻されたことを示している。煙道はSK1038などと重複するが、比較的急角度で立ち上がる。

出土遺物 (第234・235図)

遺物は、覆土及び床面を中心に出土している。主な出土遺物には、須恵器環、皿、高台付碗、灰釉皿、土師器環、台付甕、甕、砥石刀子などがある。

1～4は須恵器環で、口径12.5cmと13.5cmの二種類が出土している。いずれも口縁部は緩やかに外反する。12～14は皿で12・13は須恵器、14は酸化窑焼成である。5～11は須恵器高台付碗である。いずれも口径は14cm前後であるが、器高は5.2cm前後と6.5cm前後のものがあつた。1～14の底部調整はいずれも回転糸切りである。16は灰釉皿の口縁部破片である。15は須恵器甕胴部の小破片で、外面は平行叩きかみられるが、内面は不明瞭である。17は土師器環破片で、体部中央には指の押さえがみられる。18～21は土師器台付甕の破片で、18～20は口縁部、21は脚部の破片である。19はやや大振で、小型甕の可能性も考えられる。22～27は土師器甕の口縁部から底部にかけての破片である。口径は20cm前後で、口縁部形態の「コ」の字口縁が崩れ始めた段階に該当すると考えられ、過渡期的な様相があらわれている。28は砥石で、先端が欠けているが、全面に使用痕跡がみられる。

住居跡の年代は出土遺物から、9世紀末から10世紀初め頃と考えられる。

第65号住居跡 (第237・238図)

調査区の中央、西寄りのP-9グリッドに位置している。平面形態は不整形である。規模は長辺4.70m、短辺3.24m、深さ0.47mである。主軸方向はN-28°-Eである。

カマドは、北辺右寄りに1基付設されていた。残存長は1.56m、焚口幅50cm弱と推定される。袖は右側が一部検出された。構築材は灰色粘土とロームブロックが主体で、ロームブロックを芯にして周囲を灰色粘土と暗褐色土で構築している。燃焼面は床面より僅かに掘り窪められ、細長く、浅いレンズ状になっている。西側の壁には浅い段差があり、西壁は作り直している可能性がある。燃焼面から煙道には比較的緩やかに立ち上がり、覆土中には炭化粒子が多く混入している。

床面は平坦で、大規模な掘り込みを伴う貼り床は検出されなかった。ピットは2基検出され、カマドの右よりの北東コーナーのピット(P1)は浅いため、柱穴とは考えにくく、P2についても、P1と同規模で炭化物等の混入がみられることから、同様の施設と考えられ、貯蔵穴の可能性もある。壁溝はカマドやピットの部分を除いて全周する。

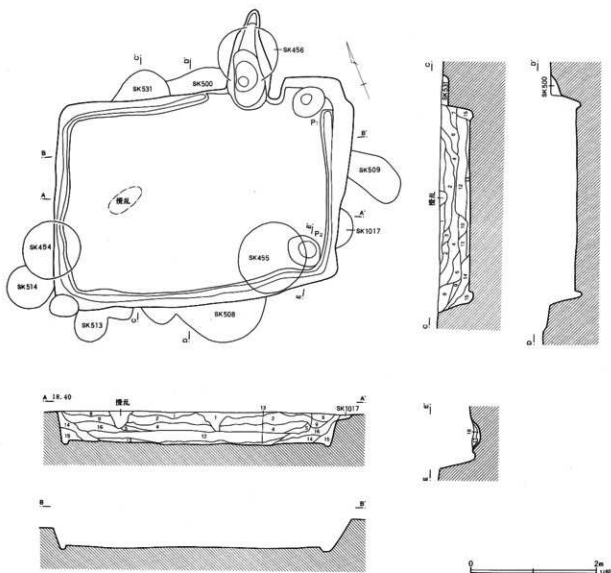
出土遺物 (第239図)

遺物は覆土を中心に出土している。主な出土遺物には高台付碗、土師器甕などがある。

1と2は須恵器高台付碗で、口径約15cm、器高6cm弱である。体部は緩やかに内湾し、口縁端部で少し外反する。底部は、回転糸きり後に外周をナデで高台を貼りつけ、補強粘土を加えてナデで調整する。4は土師器甕の口縁部破片である。口縁部は「コ」の字口縁がやや崩れている。

住居跡の年代は出土遺物から、9世紀末から10世紀初頭と考えられる。

第237図 第65号住居跡



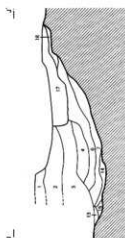
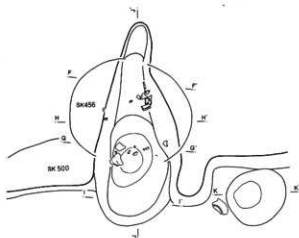
S J 65

- 1 黒褐色土 焼土粒子微量、ローム粒子少量含む。
 2 暗褐色土 ローム粒子微量含む。
 3 暗赤褐色土 焼土粒子、焼土ブロック多量、ローム粒子少量含む。
 4 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
 5 暗黄褐色土 ローム粒子多量含む。
 6 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
 7 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 8 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
 9 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子微量含む。

- 10 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
 11 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック、炭化粒子少量含む。
 12 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子少量、ロームブロック多量含む。
 13 黒褐色土 ローム粒子微量含む。粘性あり。
 14 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化粒子少量含む。
 15 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。
 16 黒褐色土 ローム粒子、炭化粒子、黒色粒子少量含む。
 17 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化粒子少量含む。
 18 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。

第65号住居跡出土遺物観察表 (第239図)

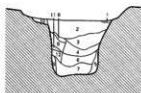
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備	考
1	高台付埴	(14.2)	6.4	(5.8)	BDKL	A	暗灰色	50	内面炭化物付着	
2	高台付埴	(15.2)	6.0	7.9	BIKL	C	暗灰褐色	50		
3	台付甕	12.0			KL	A	暗赤褐色	20		
4	釘	長さ(3.2)×幅0.3×厚さ0.3cm、重量1.00g								



f. 18. 40



g.



h.



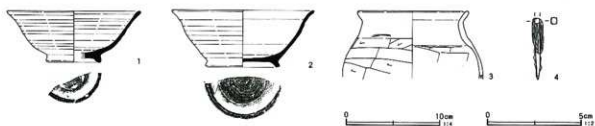
i.



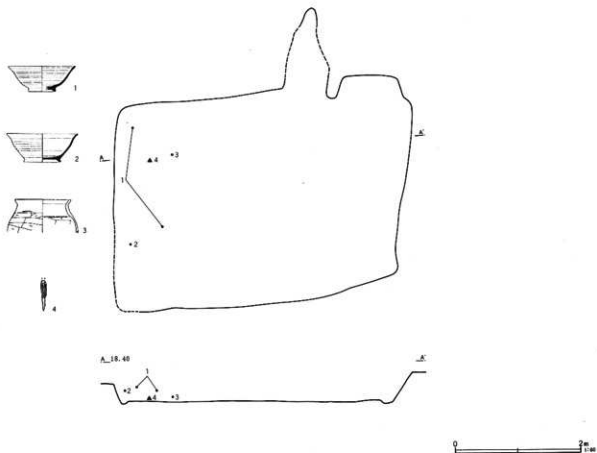
S J 65カマド

- | | |
|----------|----------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子、焼土粒子微量含む。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子微量含む。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子、灰褐色粘土粒子、焼土粒子少量含む。 |
| 5 灰褐色土 | ローム粒子、灰褐色粘土粒子多量含む。 |
| 6 赤褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子多量含む。 |
| 7 褐色土 | 焼土粒子多量、炭化粒子少量含む。 |
| 8 暗褐色土 | ローム粒子、灰色粘土粒子、灰色粘土ブロック多量含む。 |
| 9 灰褐色土 | 灰褐色粘土粒子、灰褐色粘土ブロック多量含む。 |
| 10 暗黄褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 11 赤褐色土 | 焼土粒子多量含む。被熱面。 |
| 12 赤褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子、灰色粘土粒子多量含む。 |
| 13 黒褐色土 | 炭化粒子、焼土粒子少量含む。 |
| 14 灰褐色土 | ローム粒子少量、焼土粒子、灰色ブロック多量含む。 |
| 15 暗黄褐色土 | ローム粒子、焼土粒子、灰色ブロック少量含む。 |
| 16 暗褐色土 | ローム粒子多量、焼土粒子、炭化粒子少量含む。 |
| 17 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |

第239図 第65号住居跡出土遺物



第240図 第65号住居跡遺物分布図



第66号住居跡 (第241図)

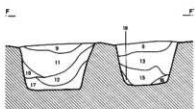
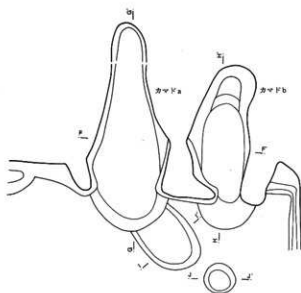
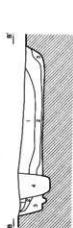
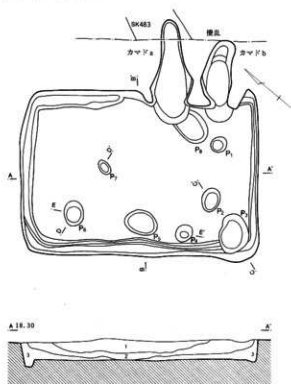
調査区の中央、やや西寄りのR-8グリッドに位置している。S J 62の北西約5mに隣接し、カマドaは後世の土壌SK483に重複している。平面形態は長方形で、規模は長辺3.77m、短辺2.58m、深さ0.30mである。主軸方向はN-47°-Eである。

カマドは北辺右寄りに2基検出された。2基のカマドは同時存在した可能性もあるが、遺物の出土状況や袖の残存などの遺存状態から判断すると、カマドaが

古く、カマドbが新しいと推定される。しかし、カマドaの袖もカマドb構築にあたって完全に壊れているわけではなく、袖も一部が残存しており、カマドb使用の妨げにならない程度に袖を壊したことも推定される。また、燃焼面の断面の観察からは、カマドはa・bとも同様な埋没の仕方をしており、カマドaは住居が埋没するまで、形を留めていたものとみられる。

カマドaは残存長1.65m、焚口幅は0.30m前後と推定される。袖は左右とも一部が残り、下層はロームブ

第241図 第66号住居跡・カマド



S J 66

- 1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 3 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 4 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
 5 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。
 6 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
 カマド a・b
 7 暗褐色土 炭化粒子、ローム粒子、灰褐色ブロック少量含む。
 8 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 9 暗褐色土 ローム粒子、灰褐色ブロック少量含む。
 10 暗灰褐色土 ローム粒子、灰褐色粒子少量含む。
 11 灰褐色土 焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子多量、ローム粒子、暗褐色ブロック少量含む。粘性あり。

- 12 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子、灰褐色ブロック少量含む。
 13 灰褐色土 焼土粒子、暗褐色粒子少量含む。粘性あり。
 14 暗灰褐色土 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子、灰褐色粒子多量含む。
 15 暗灰褐色土 焼土粒子、炭化粒子、ロームブロック多量、ローム粒子、灰褐色粒子少量含む。
 16 灰褐色土 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子少量含む。
 17 灰褐色土 灰褐色ブロック、暗褐色ブロック多量含む。粘性あり。
 18 灰褐色土 灰褐色ブロック、暗褐色ブロック多量含む。
 19 暗黄褐色土 ローム粒子多量、灰褐色ブロック、暗褐色ブロック少量含む。

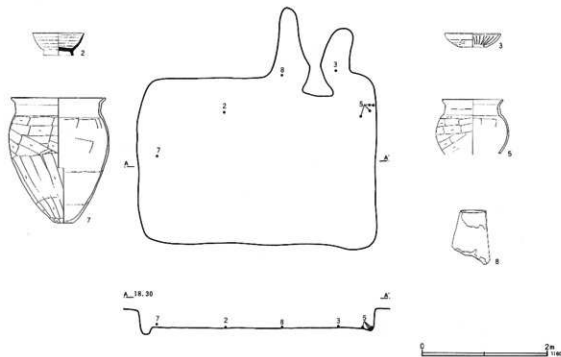
ロックと暗褐色土で、上層は灰色粘土を主体に構築されている。燃焼面は床面より約15cm掘り込まれているが、使用時は床面と同じくらいの位置まで埋め戻している。燃焼面から煙道へは緩やかに傾斜し、先端でSK483に壊されているものの、急傾斜して立ち上がるとみられる。カマド内からは土師器製の小破片が数点出土している。

カマドbはカマドaのすぐ右側に構築され、残存長1.29m、焚口幅は約25cmと小型化している。カマドaが住居の主軸方向に向いているのに対して、やや東に主軸が振れている。袖は大部分が壊れていたが、カマドaよりも焚口から燃焼面へは細くし、燃焼面から煙

道にかけては段を設けている。また、燃焼面から煙道の側壁には被熱を受けた灰剥が認められた。カマド内からは、土師器製の小破片が出土している。

床面は概ね平坦であるが、カマド周辺には凹凸がみられる。貼り床は全面にみられたが、特にカマド周辺は深く掘り込まれていた。ピットは8基検出されたが、P1・2・6以外は柱穴としては配置が不規則である。また、P1とP4が円形であることを除いては、いずれも平面形態は楕円形である。P3は深さは他のピットと変わらないが、やや大きく、隅に位置するなどを考慮すると、貯蔵穴の可能性も考えられる。P8はカマドaの掘形と重複し、住居に伴うピットかどうかは

第242図 第66号住居跡遺物分布図



不明である。

壁溝はカマド部分を除いて全周し、西壁付近がやや幅広く、深くなっている。

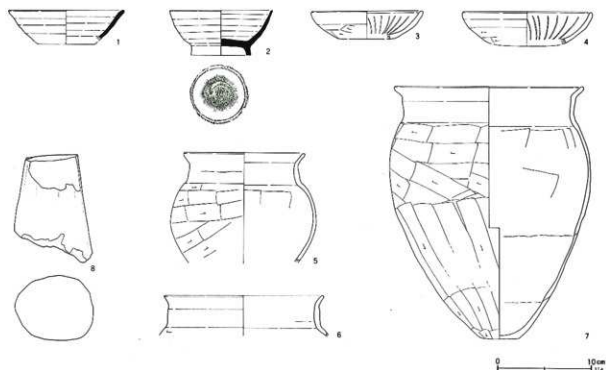
出土遺物 (第243図)

遺物は床面及びカマド周辺から少量出土している。主な出土遺物には、須恵器環、高台付埴、土師器台付甕、甕などがある。

1は須恵器環の破片で、底部を欠く。2は須恵器高台付埴で、口径約11cmとやや小振りである。3・4は土師器環の破片で内面には放射状の暗文が施されている。5は土師器台付甕の胴部下半から脚部、6・7は土師器の、いわゆる「コ」の字口縁の甕である。8は土製の支脚で基部が欠損している。

住居跡は出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

第243図 第66号住居跡出土遺物



第66号住居跡出土遺物観察表 (第243図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.2)			BCKL	C	灰色	20	
2	高台付埴	11.0	4.7	6.4	BCKL	A	暗灰色	85	
3	環	(12.0)	6.2	(2.9)	HK	A	淡橙褐色	15	内面に放射状暗文 内外面漆状の黒色樹脂付着
4	環	(13.8)			EK	A	赤褐色	25	内面に放射状暗文 内外面漆状の黒色樹脂付着
5	台付甕	(13.0)			EK	A	赤褐色	35	
6	甕	17.0			EKL	A	暗橙褐色	10	外面に炭化物付着
7	甕	20.2	26.8	4.0	KL	A	淡黒褐色	90	輪積み痕跡明瞭 胴部に炭化物付着
8	支脚	長さ(11.4)×幅8.3×厚さ6.8cm							

第67号住居跡 (第244図)

調査区の南、M-11グリッドに位置している。平面

形態は長方形とみられるが、南辺を後世の溝跡S D

166に、カマドが存在すると予想される北辺中央部分を

攪乱と重複している。規模は長辺3.57m、短辺2.80m、深さ0.34mである。主軸方向はN-30°-Eである。

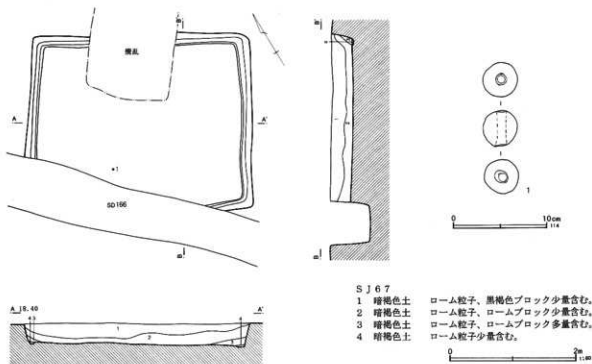
床面は平坦で、貯蔵穴、ピット、貼り床等は検出されなかった。壁溝は浅いが、全周するものとみられる。

出土遺物 (第244図)

遺物は他の遺構等と重複していることもあり、殆ど出土しなかった。主な出土遺物には、土師器製の小破片、土玉がある。

1は土玉である。直径28mm、円孔直径8mmである。

第244図 第67号住居跡・出土遺物



第67号住居跡出土遺物観察表 (第244図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土玉	直径2.8×孔径0.8cm			K	A	淡橙褐色		重量18.1g

第68号住居跡 (第245図)

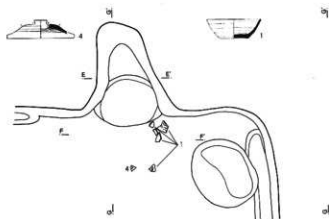
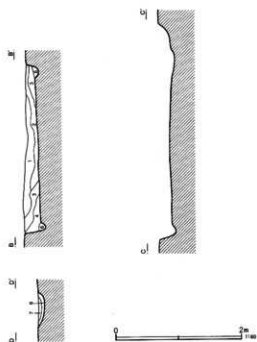
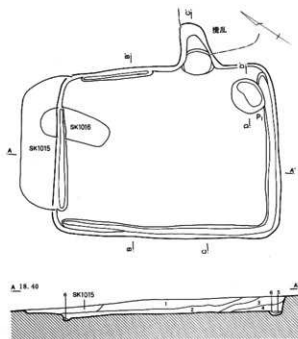
調査区の西隅、Q-2グリッドに位置している。住居跡は、カマドの一部を攪乱に、西辺を後世の土壌SK1015に壊されている。また、床面の調査過程でSK1016が検出されたが、壁溝が土壌を掘り込んでおり、土壌は住居構築以前であることが確認された。規模は長辺3.14m、短辺2.52m、深さ0.21mである。主軸方向はN-47°-Eである。

カマドは残存長0.83mで、北辺の中央右寄りに付設されていた。既に袖は殆どなかったが、焚口付近の土

層断面には、袖等の構築材に用いたとみられる灰色粘土粒子が集中する箇所が確認された。燃焼面はピット状に掘り込まれ、再度ロームブロックである程度まで埋め戻して燃焼面としている。煙道は短く、急角度で立ち上がる。

床面はほぼ平坦で、やや西側に微傾斜している。床面には、P1の周囲に炭化物が多くみられた。貼り床は全面に及んでいるが、掘り込みは浅かった。貯蔵穴(P1)はカマドの右下で検出された。長径60cm、短径50cm、深さ10cmで、覆土上層は焼土と炭化物を多量

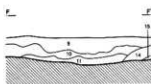
第245図 第68号住居跡・カマド・遺物分布図



- S J 68
- | | |
|---------|----------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒子、炭化粒子少量含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 4 黒褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒子少量、ロームブロック微量含む。 |
| 7 黒褐色土 | 焼土ブロック、炭化粒子多量含む。 |
| 8 暗黄褐色土 | ロームブロック多量、焼土粒子少量含む。 |



- カマド
- | | |
|----------|------------------------|
| 9 暗褐色土 | ローム粒子多量、焼土粒子、炭化粒子少量含む。 |
| 10 灰褐色土 | 炭化粒子多量含む。粘性あり。 |
| 11 黒褐色土 | 炭化粒子、焼土粒子多量含む。 |
| 12 暗褐色土 | 灰色粒子、ローム粒子少量含む。 |
| 13 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 14 赤褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子多量含む。 |
| 15 褐色土 | ローム粒子少量含む。 |



含んでおり、周辺の炭化物とともに混入したものと考えられる。

壁溝は南を除く各隅で溝が切れているが、西から北壁付近は確認できた部分が浅いこともあり、基本的には全周する可能性がある。他に柱穴等は検出されなかった。

出土遺物 (第246図)

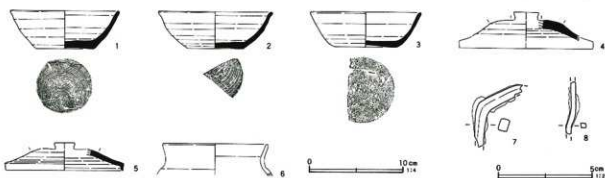
遺物はカマド右袖付近、床面、覆土中から少量出土している。カマド周辺は土師器甕、台付甕類の破片が

主体である。

1～3は須恵器坏で、口径12cm前後、底径6cm強、器高4cm弱である。1・2は口縁端部が僅かに反外する。底部は回転糸切りである。3は橙褐色をし、底部は回転糸切り後、周囲を手持ちてへラケズリするものである。4・5は須恵器蓋の破片で、ともに揃みを欠く。6は土師器台付甕の口縁部破片である。7・8は種別の不明な鉄製品である。

住居跡は出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

第246図 第68号住居跡出土遺物



第68号住居跡出土遺物観察表 (第246図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.6	4.0	6.0	CKL	A	灰色	100	
2	坏	(12.2)	3.9	(6.0)	CKL	A	灰白色	45	
3	坏	(11.6)	3.7	6.6	BFKL	A	橙褐色	60	
4	蓋	(14.2)			CKL	A	灰色	30	
5	蓋	(11.6)			CKL	A	灰色	25	
6	台付甕	(11.2)			BKL	C	暗茶褐色	10	炭化物付着
7	鉄製品	長さ(0.6)×幅0.5×厚さ0.6cm、重量5.44g							不明
8	鉄製品	長さ(2.7)×幅0.25×厚さ0.25cm、重量0.85g							不明

第69号住居跡 (第247図)

調査区の西隅、P-3グリッドに位置している。北側、約5mにS J72が隣接している。住居跡は西辺と中央部を中心に攪乱や後世の土壌が入っているため、遺構の遺存状態は悪く、壁溝の続き等は検出することはできなかった。平面形態は正方形に近く、規模は長辺3.68m、短辺3.07m、深さ0.07mである。主軸方向はN-17-Eである。

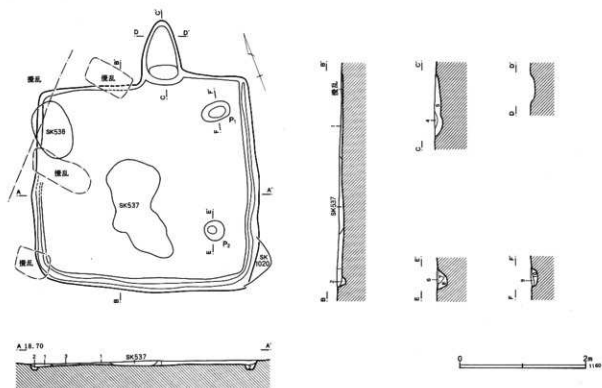
住居跡は遺存状態が悪いことや掘り込みが浅いこともあり、確認時点でカマド付近は床面が露出している

状態であった。

カマドは北辺中央、やや右寄りに付設されていた。残存長は約1mで、既に袖はなく、燃焼面も一部攪乱が入っているため、遺存状態は悪い。カマド内の覆土には焼土は多くみられるが、殆どが浮いた状態であった。床面は平坦で、カマド周辺は焼土、炭化物が多く、中央部には粘土が集中してみられた。なお、貼り床は検出されなかった。

ピットは2基検出され、P1はカマドの右下に位置することから、貯蔵穴の可能性も考えられるが、P2

第247図 第69号住居跡



S J 6 9

- 1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック、黒褐色ブロック、ローム粒子少量含む。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック、灰褐色ブロック多量含む。

- 4 黒褐色土 焼土粒子、ローム粒子少量含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒子少量、ローム粒子多量含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 7 暗黄褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
- 8 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 9 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック、炭化粒子少量含む。
- 10 褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。

との位置関係や大きさを考慮すると、柱穴の可能性が高い。壁溝は西辺の北側か壁乱やSK538などと重複するため切れているが、カマドのある北壁を除いて全周するものと考えられる。

出土遺物 (第248・249図)

遺物は須恵器環、土師器環が出土している。1～3は須恵器環の破片で、口縁端部が外反し、底部は回転

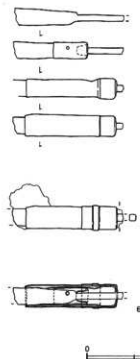
糸切りである。4・5は土師器環で、直線的に開くが、体部は指で押えるために外反気味になる。底部は手持ちヘラケズリである。6は鉄に銅を流し込んだもので、種別や時期は不明である。

住居跡の年代は、出土遺物から9世紀後半と考えられる。

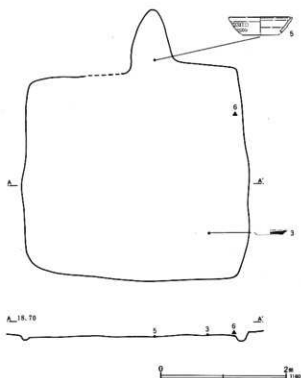
第248図 第69号住居跡出土遺物(1)



第249図 第69号住居跡出土遺物(2)



第250図 第69号住居跡遺物分布図



第69号住居跡出土遺物観察表 (第248・249図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	環	(13.2)			BGKL	A	灰色	10	外面炭化物付着 口縁外面に漆状の痕跡あり	
2	環	(12.4)			ABGKL	A	暗灰色	30		
3	環		3.3	5.6	BK	A	乳白色	15		
4	環	(13.2)		(7.0)	BKL	A	橙褐色	20		
5	環	(13.6)			FKL	A	橙褐色	15		
6	鉄製品	長さ(5.85)×幅1.15cm、重量17.94g								不明 鉄に銅金具を組んだもの

第70号住居跡 (第251図)

調査区の中央、西寄りR-9グリッドに位置している。住居跡は、北西隅を後世の溝跡S D98に重複しているが、遺存状態は比較的良好であった。平面形態は長方形を呈し、規模は長辺約4m、短辺2.78m、深さ0.34m、主軸方向はN-83°-Eである。

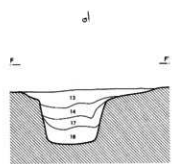
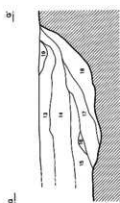
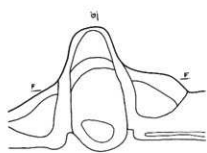
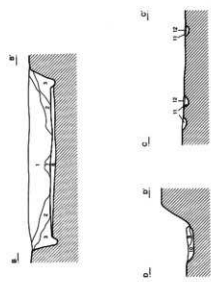
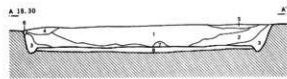
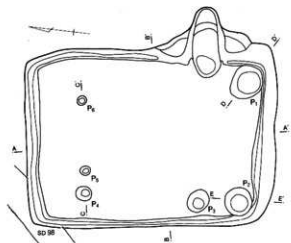
カマドは東辺南寄りに1基付設されていた。残存長は1.11mで、集落内では標準的な大きさである。袖は検出されなかったが、焚口付近には袖に用いたとみられる灰白色粘土がブロック状に確認できた。カマドの掘り込みは床面から約5cmであるが、カマドの断面観察からは掘形の直上まで焼土や炭化物が自然に堆積し

ていた。従って、燃焼面はロームブロック等で埋め戻して燃焼面を整えずに使用したものとみられる。煙道は急傾斜して立ち上がるが、壁面付近はロームブロックなどの壁や天井の崩落土がみられる。

床面は平坦であるが、やや南側に傾斜している。貼り床は全面にわたって確認されたが、中央部が僅かに窪んでいる。また、床面の中央には焼土が集中する箇所があり、直径約1mの範囲に広がりがあがる。特にレンズ状の掘り込みは検出されなかったが、周囲の住居群にみられるように小竈台の可能性も考えられる。

ピットは6基検出された。P1はカマドの右下に位置し、貯蔵穴とみられる。形態は楕円形で、覆土上層

第251図 第70号住居跡・カマド



- S J 7 0
- 1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
 - 2 黒褐色土 焼土粒子、炭化粒子少量、ローム粒子、暗褐色ブロック多量含む。
 - 3 暗黄褐色土 ローム粒子多量含む。
 - 4 暗灰褐色土 白色粒子、ローム粒子を微量含む。
 - 5 暗褐色土 白色粒子、ローム粒子、ロームブロック多量含む。
 - 6 黒褐色土 ローム粒子を少量含む。
 - 7 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
 - 8 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。楕形。
 - 9 黒褐色土 炭化粒子、ローム粒子、ロームブロック少量含む。
 - 10 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。
 - 11 暗灰褐色土 ローム粒子、ロームブロック、暗褐色ブロック少量含む。
 - 12 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。

カマド

- 13 暗褐色土 灰褐色ブロック少量含む。
- 14 黒褐色土 灰褐色ブロック少量含む。
- 15 暗黄褐色土 灰褐色ブロック少量含む。
- 16 黄褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子、暗褐色ブロック少量含む。
- 17 暗灰褐色土 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子、灰褐色粒子多量含む。
- 18 暗褐色土 ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子多量含む。
- 19 灰褐色土 ローム粒子少量、灰色粒子多量含む。

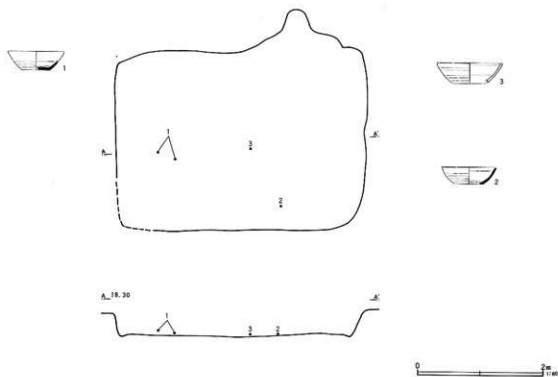


には炭化物が多量含まれる。P2の覆土も同様で、大きさもP1に近いことから貯蔵穴の可能性も考えられる。しかし、カマドを除いて全周する壁溝との先後関係では、壁溝を寸断して構築しており、P1との同時性は薄く、壁溝が機能しない状況での構築は疑問も残る。他のピットについては、P1・2とは明らかに大きさや覆土の様相が異なっており、柱穴などの痕跡の可能性が考えられる。

出土遺物 (第253図)

遺物は床面、覆土及び壁溝内から、須恵器坏、土師器甕などが出土した。いずれも小破片が多く、実測に至らないものが多かった。1・2は須恵器坏で、口径約12cm、底径約6cmと推定されるものである。いずれも南比企産であるが、3は酸化焰焼成の坏である。特に口縁先端のつくりが須恵器坏類とは大きく異なる。

第252図 第70号住居跡遺物分布図



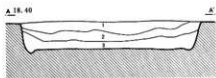
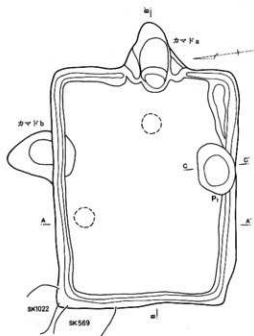
第253図 第70号住居跡出土遺物



第70号住居跡出土遺物観察表 (第253図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏			(6.0)	BCKL	A	暗灰色	30	
2	坏	(11.6)	3.6	(6.2)	BCKL	A	暗灰色	35	
3	坏	(14.0)			CK	C	淡橙褐色	20	酸化焰焼成

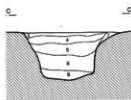
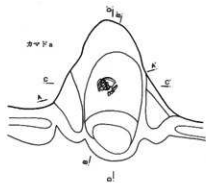
第254図 第71号住居跡・カマド(1)



SJ71

- 1 暗褐色土 炭化粒子、灰褐色ブロック、ローム粒子、焼土粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子、ロームブロック多量、黒褐色ブロック、灰褐色ブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 炭化粒子少量、ローム粒子、灰褐色粒子多量含む。
- 4 灰褐色土 灰色粒子、ロームブロック多量、焼土粒子、炭化粒子少量含む。粘性あり。
- 5 暗灰褐色土 灰色粒子少量、焼土粒子、炭化粒子多量含む。粘性あり。
- 6 暗赤褐色土 焼土粒子、ロームブロック、炭化粒子、暗褐色ブロック少量含む。
- 7 赤褐色土 焼土粒子、ロームブロック多量、暗褐色ブロック少量含む。
- 8 灰褐色土 灰色ブロック多量、暗褐色ブロック少量含む。粘性あり。
- 9 暗褐色土 炭化粒子少量、灰褐色粒子多量含む。焼土粒子、ローム粒子多量、明灰色ブロック少量含む。
- 10 暗褐色土

0 2m



0 1m

第71号住居跡 (第254・255図)

調査区の北西側、R・S-5グリッドに位置している。S J 60の西、約5mに隣接している。住居跡は北西隅をS K 569・1022に、中央部はS B 26のピットに一部を壊されている。平面形態は長方形で、カマドは2基検出された。規模は長辺4.30m、短辺3.54m、深さ0.48mであるが、東辺が僅かに長い。主軸方向はN-47°-Eである。

カマドは東辺(カマドa)と北辺(カマドb)に1基づつ検出された。壁溝との重複からカマドbが古く、カマドaが新しい。カマドaは左右の袖の基部付近が僅かに残存していたが、袖の上層部は埋没段階で崩落している。袖の構築には灰白色粘土とロームブロックが主体に用いられていたとみられ、土器類とともにカマドの周囲に多くみられた。燃焼面の上層は、天井部や側壁の崩落土が確認でき、ある程度埋没した段階で天井や側壁が崩落したものと考えられる。

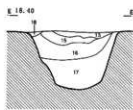
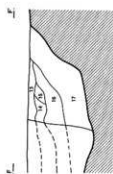
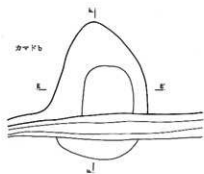
燃焼面の掘り込みは、床面から約10cmで、比較的平坦であるが、焚口側はやや深く、ピット状になってい

る。下層の覆土は灰色粘土のブロックが主体で、焼土、ロームブロック、遺物は殆ど含まれていない。中層より上では焼土の割合が多くなっている。また、燃焼面中央からは土師器台付甕が伏せた状態で出土しているが、カマド周辺は比較的土師器が多くみられる。煙道は短く、燃焼面から煙道にかけては急傾斜して立ち上がる。

カマドbは、焚口付近をカマドa構築時に埋め戻されて、壁溝がつけ替えられている。燃焼面から煙道にかけての覆土の堆積は自然堆積に類しているが、下層は一気に入っており、カマドの付け替えに際して壊されたものとみられる。カマドの構造や規模はaと同様である。カマド内からは壊されていることもあり、遺物は出土していない。

床面は平坦で、図示しなかったが、全面にわたって貼り床が確認された。ピットは1基検出されたが、壁溝を切り込むように構築されており、この住居に伴わない可能性もある。壁溝は全周し、南側がやや幅広くなる。

第255図 第71号住居跡カマド(2)

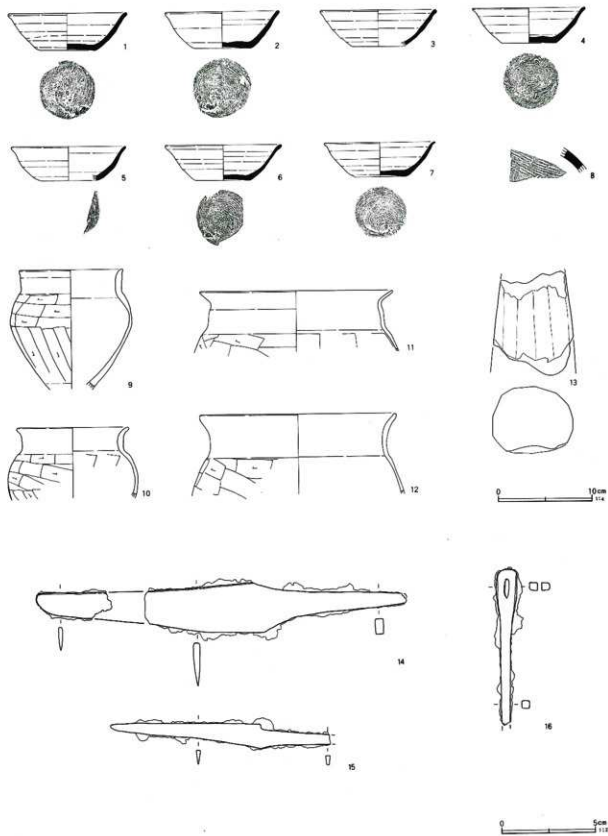


S J 71カマド

- 11 暗褐色土 炭化粒子、灰褐色ブロック少量、ローム粒子少量含む。
- 12 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子、ロームブロック多量、黒褐色ブロック、灰褐色ブロック少量含む。
- 13 灰褐色土 灰色粒子、ロームブロック多量、炭化粒子少量含む。粘性あり。
- 14 暗赤褐色土 炭化粒子、焼土粒子、ローム粒子、ロームブロック、灰色ブロック少量含む。
- 15 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 16 暗褐色土 ローム粒子、灰色粒子少量含む。



第256图 第71号住居跡出土遺物



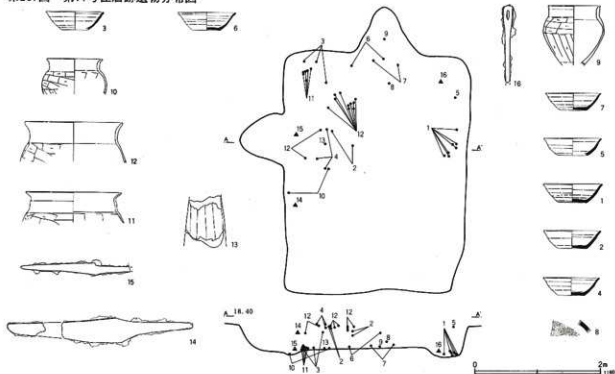
出土遺物 (第256図)

遺物はカマド周辺、床面を中心に須恵器環、土師器台付甕、甕、土製支脚、鉄製品などが出土している。鉄製品やスラグはカマド周辺から多く出土しており、灰跡が検出されなかったことを考慮すると、カマドを鍛冶炉として使用していた可能性も考えられる。

1～7は須恵器環で、口径約12cm、底径6cm弱、器高4cm弱と規格性のある製品が多い。底部は回転糸切りで、いずれも南比企産である。8は須恵器甕の破片

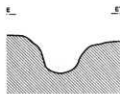
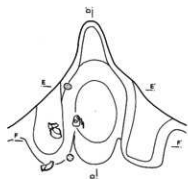
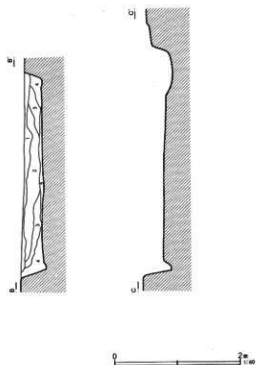
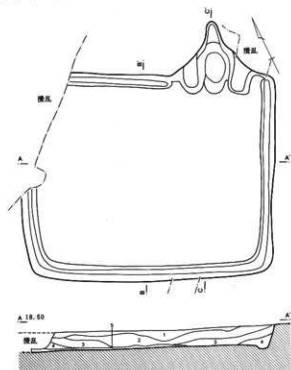
で、外面は平行叩きである。9・10は台付甕の破片である。甕同様「コ」の字口縁であるが、9は甕に比べてやや厚くつくられる。11・12は土師器甕の口縁部破片で、「コ」の字口縁がやや崩れている。13は土製の支脚で、2cm前後の幅で縦方向に削って調整されている。14・15は刀子で、ともに基部に欠く。鏝の進行が著しく、脆くなっている。16は釘で、先端に欠く。基部には細長い孔が穿たれている。

第257図 第71号住居跡遺物分布図



第71号住居跡出土遺物観察表 (第256図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	環	12.60	4.1	6.0	CKL	A	暗灰色	70	粘土のつなぎ目明瞭 口縁に自然釉	
2	環	12.2	3.9	6.0	BKL	A	暗灰色	90		
3	環	(12.4)	3.8	(5.4)	BCKL	A	暗灰色	20		
4	環	(12.0)	3.7	5.8	BCGKL	A	暗灰色	60		
5	環	(12.2)	3.6	(6.6)	CKL	A	明橙褐色	20		
6	環	(12.4)	3.8	(5.8)	BCKL	A	暗灰色	50		
7	環	(11.8)	(3.6)	(5.4)	BCKL	A	暗灰色	60		
8	甕				CKL	A	暗灰色	10		
9	台付甕	11.0			BEKL	A	赤褐色	65		一部口縁部に炭化物の付着
11	台付甕	11.9			K	A	暗赤褐色	40		
10	甕	(20.6)			BFKL	A	暗橙褐色	10		
12	甕	(21.0)			BKL	A	淡暗赤褐色	60		
13	支脚	長さ11.1×幅8.5×厚さ7.0cm							不明 先端環状	
14	刀子	長さ(19.6)×身幅2.2×棟幅0.4cm、重量54.37g								
15	刀子	長さ(11.75)×身幅0.75×棟幅0.2cm、重量9.72g								
16	鉄製品	長さ(8.2)×幅0.4×厚さ0.4cm、重量10.65g								



S J 7 2

- 1 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子、灰褐色ブロック少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量含む。
- 4 褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量、炭化粒子、焼土粒子少量含む。
- 5 暗黄褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。

カマド

- 6 暗褐色土 灰褐色粘土粒子、ローム粒子多量含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 8 黒褐色土 焼土粒子、炭化粒子多量含む。
- 9 灰褐色土 灰褐色粘土粒子、ローム粒子多量含む。
- 10 赤褐色土 焼土粒子、ローム粒子、ロームブロック多量含む。
- 11 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子多量、灰褐色粘土粒子少量含む。
- 12 赤褐色土 焼土粒子多量含む。
- 13 黒褐色土 炭化粒子多量含む。
- 14 灰褐色土 灰褐色粒子多量、焼土粒子少量含む。
- 15 明褐色土 灰褐色粒子、焼土粒子多量含む。
- 16 暗褐色土 灰褐色粒子、ローム粒子少量含む。
- 17 暗褐色土 灰褐色粒子、ロームブロック少量、ローム粒子多量含む。
- 18 暗褐色土 灰褐色粒子多量、ローム粒子少量含む。
- 19 黒褐色土 ローム粒子少量含む。



第72号住居跡 (第258図)

調査区の西、Q-3グリッドに位置している。S J 69の北約5mにあり、北西隅住居群の中心部に位置している。平面形態は長方形で、北西隅とカマド右袖上層を擾乱により壊されている。規模は長辺3.94m、短辺3.21m、深さ0.31mである。主軸方向はN-24°-Eである。

カマドは北辺東寄りに1基付設されているが、この集落内では、カマドが設けられている辺の長さは他の辺に比べてやや長めになっているものが多く、この住居も典型的な例である。カマドは住居の壁をやや外側に掘り込んで構築されており、平面上は燃焼面が壁の外側に出るような構造になっている。

袖は遺存状態が比較的良かったが、燃焼面側は崩落が著しく、原形を留めていない。袖の構築材には灰褐色粘土がロームブロックとともに多く使用され、特に焚口付近に集中している。

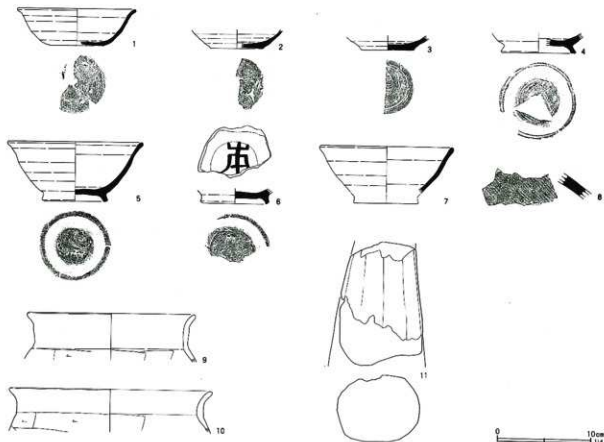
焚口は、カマド周辺から東辺付近にかけて貼り床されていることや焼土が周囲に広く分布していることもあり、掘り込み面の位置がやや不明瞭である。燃焼面との位置関係を考慮すると、貼り床の部分まで少し延びる可能性もある。燃焼面から煙道にかけては急角度でたちあがる。燃焼面の底面は全体に被熱しているが、奥壁寄りには赤変していた。覆土の中層には焼土とともに炭化物も多く含まれている。煙道は短く、掘り込みも浅かった。

床面は前述のように、カマド周辺と東壁寄りに貼り床が確認できた。掘り込みは深いところ約10cmである。床面では特にカマド周辺で焼土や炭化物が貼り床の上面に多くみられた。壁溝は全周し、カマドから離れた西側がやや深くなっている。また、柱穴などのピットは確認されなかった。

出土遺物 (第259図)

遺物は須恵器杯、高台付椀を主体に、土師器甕など

第259図 第72号住居跡出土遺物



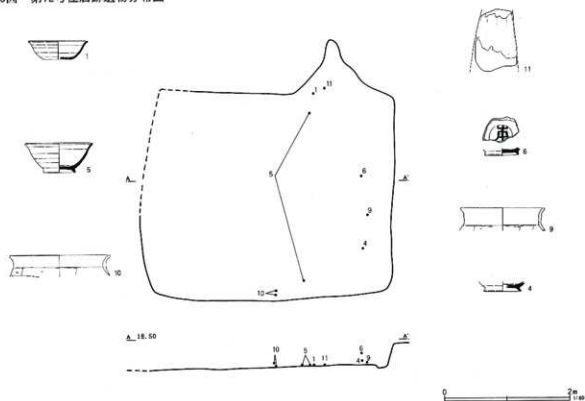
が出土している。1-3は須恵器坏で、ロクロの痕跡を強く残す。底部は回転糸切りである。4-7は須恵器高台付埴で、器高や高台径が大振りである。6は内面に部分に「岸」の黒書がある。7は須恵器甕の小破片で、外面は細かい平行叩き、内面は横方向にナテ調整されている。須恵器坏と甕は南比企産、高台付埴は末野産と考えられる。

8-10は土師器甕の口縁部破片で、部分的に炭化物の付着が確認できた。11は土製の支脚の破片で、カマドの燃焼部内に備え付けられた状態で出土した。出土状況からは対になって備え付けられていたものとみられる。住居跡の年代は、出土遺物から9世紀後半から末頃と考えられる。

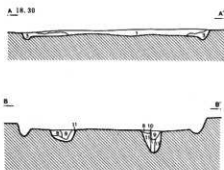
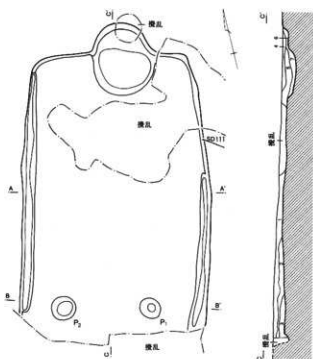
第72号住居跡出土遺物観察表 (第259図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.2	4.0	(6.4)	GKL	A	灰色	40	内面に一部油煙の跡 内面が黒 黒書
2	坏			(5.8)	BDKL	C	灰色	10	
3	坏			5.8	BGKL	C	黒褐色	10	
4	高台付埴			(8.1)	BKL	C	暗褐色	10	
5	高台付埴	(14.6)	6.3	(7.0)	BDIKL	A	橙褐色	50	
6	高台付埴			(7.4)	DHIKL	A	灰白色	10	
7	高台付埴	(14.4)			ABDEKL	A	橙褐色	10	
8	甕				BDKL	A	灰色	10	
9	甕	(18.0)			GHK	A	淡赤褐色	10	
10	甕	(21.6)			GKL	A	橙褐色	35	
11	支脚	長さ(13.2)×幅8.3×厚さ7.1cm							

第260図 第72号住居跡遺物分布図



第261図 第73号住居跡



S J 7 3

- | | | |
|----|-------|---------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒子多量、灰褐色ブロック少量含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。 |
| 3 | 暗黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | ローム粒子、焼土粒子少量含む。 |
| 5 | 黒褐色土 | ローム粒子多量、ロームブロック微量含む。 |
| 6 | 暗黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量、焼土粒子少量含む。 |
| 7 | 暗褐色土 | ローム粒子、炭化粒子、焼土粒子多量含む。 |
| 8 | 褐色土 | ローム粒子、灰褐色ブロック少量含む。 |
| 9 | 暗褐色土 | ローム粒子、炭化粒子多量、焼土粒子少量含む。 |
| 10 | 暗褐色土 | ローム粒子多量、炭化粒子少量含む。 |
| 11 | 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 |

第73号住居跡 (第261図)

調査区の西、R・S-3・4グリッドに位置している。S J 72の北、約10mに隣接しているが、南辺とカマドの周辺を掘乱などによって壊されている。カマドは北辺に1基検出された。平面形態は長方形で、規模は残存する長辺4.58m、短辺2.56m、深さ0.08mである。主軸方向はN-13°-Eである。

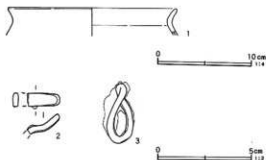
カマドは北辺中央に付設されているが、掘乱や遺構確認時に住居跡の床面が一部露出しているなど、住居跡全体の遺存状態も良くなかった。既に軸はなく、殆ど掘形の状態に近い。カマドの覆土中には焼土も認められるが、断面の観察からは二次的に混入した可能性が高い。燃焼面奥にみえる(写真図版66)ピットは掘乱によるものである。

床面は平坦な部分のみられるが、北側半分については凹凸が著しい。壁溝は西辺と東辺で検出されたが、カマドの周囲では検出されなかった。ピットは南辺付近で、2基検出された。平面形態は円形で、P 1からは柱痕跡が確認できた。

出土遺物 (第262図)

遺物は少なく、覆土中から少量出土した。1は土師器製の口縁部破片である。2・3は鉄製品であるが、種別は不明である。住居跡の年代は出土遺物が少なく、しかも小破片であるため、不確定要素もあるが、9世紀後半から10世紀初め頃と考えられる。

第262図 第73号住居跡出土遺物



第73号住居跡出土遺物観察表 (第262図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(18.0)			BEKL	A	橙褐色	10	
2	銅製品	長さ(1.7)×幅0.75×厚さ0.2cm、重量2.35g							不明
3	鉄製品	長さ3.2×厚さ0.45cm、重量3.61g							不明 8字形環状品

第74号住居跡 (第264図)

調査区の西、S・T-5グリッドに位置している。住居跡はカマド付近の一部除いては他の遺構との重複もなく、遺存状態は比較的良好である。平面形態は長方形で、カマドの形態は隣接するS J 72と類似している。規模は長辺3.61m、短辺2.79m、深さ0.48mである。主軸方向はN-23°-Eである。

カマドは北辺東寄りに1基検出された。S J 72と同様に壁を大きく掘り込んで構築されている。煙道の北西隅は擾乱により壊され、側壁も西側が長さ50cm余りにわたって崩落している。袖は左右とも崩れ、殆ど原形を留めていない。周囲には袖の構築材とみられる灰白色粘土粒子やロームブロックが集中している。

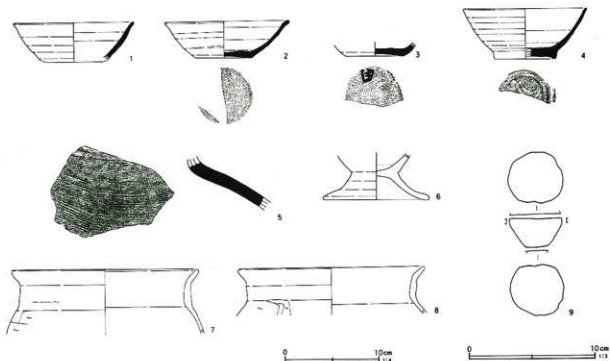
焚口はP1があることもあり、不鮮明であるが、推定される袖間の幅は狭く、床面からの掘り込みも殆ど

確認できなかった。燃焼面はほぼ平坦で、幅広である。煙道は燃焼面から段を設け、急角度で立ち上げている。煙道から燃焼面の最下層は覆土が共通で、粘土ブロックなどが多く見られることから、側壁が崩落したものとみられる。また、遺物は、焚口付近から多く出土している。

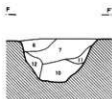
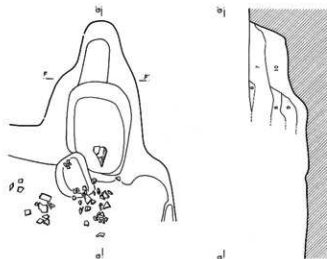
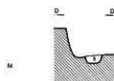
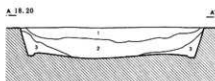
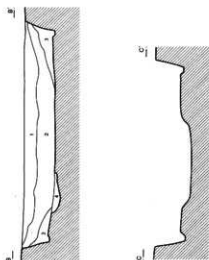
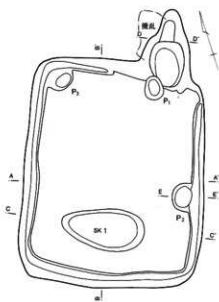
住居跡の覆土は、焼土や炭化物をやや多く含む黒褐色で構成され、ロームブロックなどのブロック状になったものが主体をなしている。床面は平坦で、貼り床は検出されなかった。ピットは3基検出されたが、いずれも不整形で、壁際やカマドの袖付近に設けられており、柱穴の位置としてはやや不自然であるが、断面の観察からはこの住居跡に伴うピットであることに問題はない。

また、南辺寄りにはSK1が検出された。平面形態

第263図 第74号住居跡出土遺物



第264図 第74号住居跡・カマド



S J 7 4

- | | |
|----------|--|
| 1 黒褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子少量、ローム粒子、暗褐色ブロック、灰褐色ブロック多量含む。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子多量、炭化粒子、黒褐色ブロック少量含む。 |
| 3 暗褐色土 | 炭化粒子少量、ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 4 暗黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む、粘性あり。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 6 灰褐色土 | 攪乱。 |
| 7 暗褐色土 | 炭化粒子、焼土粒子、黒褐色ブロック少量、ローム粒子、灰褐色ブロック多量含む。 |
| 8 暗褐色土 | ローム粒子、灰色粒子少量、焼土粒子多量含む。 |
| 9 灰褐色土 | 灰色ブロック多量、炭化粒子少量含む、粘性あり。 |
| 10 暗赤褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子、ローム粒子、灰色ブロック少量含む。 |
| 11 暗黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 12 暗黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量、焼土粒子少量含む。 |

は楕円形で、約15cmの掘り込みがある。覆土はロームブロックが主体で、埋め戻されたものと考えられる。壁溝は、カマド付近を除いて全周し、西側がやや深くなっている。

出土遺物 (第263図)

出土遺物には須恵器環、高台付埴、甕、土師器甕、台付甕、紡錘車がある。1～3は須恵器坏で、底径がやや大きく、口縁部が僅かに外反する。底部は回転糸切りである。3の底部には「日」と読める墨書がある。

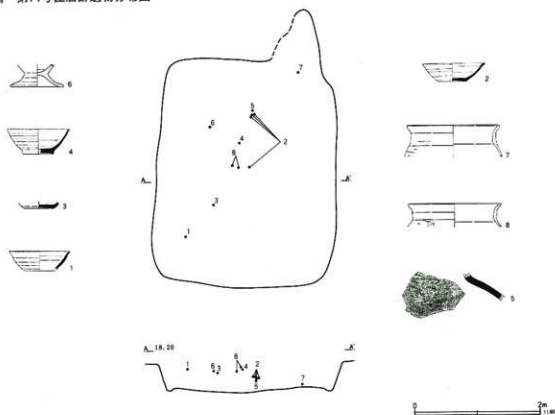
いずれも南比企産である。4は高台付埴で、高台部が欠く。口縁部の外反は弱い。産地不明。5は甕の破片で、外面細かい平行叩きが認められる。南比企産。6は土師器台付甕の脚部破片である。7・8はいわゆる「コ」の字口縁の土師器甕破片である。9は石製紡錘車の未製品である。面には製作前に研いた痕跡があり、砥石を転用したものである。

住居跡の年代は、出土遺物から9世紀後半と考えられる。

第74号住居跡出土遺物観察表 (第263図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	坏	(12.8)			CKL	A	橙褐色	20		
2	坏	13.3	3.9	6.0	BCKL	A	灰白色	70	外面炭化物付着 大だすき痕あり ゆがみ	
3	坏			6.2	BCK	A	淡青灰色	50	墨書あり	
4	高台付埴	(12.2)	5.3	(6.2)	BKL	C	淡灰色	40	内外面に炭化物付着	
5	甕				BKL	A	灰色	10	内面円影当て具	
6	台付甕			11.3	BFKL	A	赤褐色	10		
7	甕	20.0			BEFKL	A	暗赤褐色	10		
8	甕	20.0			BEKL	A	淡橙褐色	10		
9	紡錘車	長径4.2×短径1.9×厚さ2.2cm、重量43.76g								未製品 砥石からの転用

第265図 第74号住居跡遺物分布図



第75号住居跡 (第266図)

調査区の西隅、O-2・3グリッドに位置し、住居跡の約半分は調査区外にあたる。住居跡の調査区外の推定線は、既に鴻巣市教育委員会が調査をし、住居の形態が明らかになっている。平面形態は正方形に近い長方形で、残存する長辺1.34m、短辺3.03m、深さ0.20mである。主軸方向はN-43°-Eである。

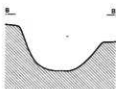
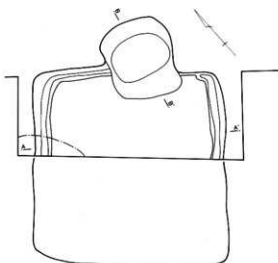
カマドは北辺中央に1基検出されたが、攪乱が入っているため、原形を留めていない。カマドとした部分は掘形で、側面に僅かに被熱した部分が数箇所認められる。覆土には焼土粒子も確認できるが、二次的混入した可能性が高く、自然の土層変化ではない。

住居跡の覆土は、ローム粒子、ロームブロックを含む暗褐色土で構成されるが、壁際では攪乱が入るため、層位の変化が著しい。床面は平坦で、貼り床は検出されなかった。壁溝は推定してあるが、カマド部分を除いて全周するとみられる。また、ピットなどは検出されなかった。

出土遺物 (第267図)

出土遺物には、須恵器環、甕、土師器環、刀子がある。いずれも覆土中からの出土で、小破片である。1は須恵器環の体部下半破片で、底部は回転糸切りである。2は須恵器甕の胴部破片で、外面は平行叩きである。1・2は南比企産である。3は土師器環で淡橙褐色をし、横ナデ後指で体部中央を調整する。底部は手

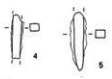
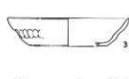
第266図 第75号住居跡



S J 7 5

- 1 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子、ロームブロック少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量含む。軟質。

第267図 第75号住居跡出土遺物



第75号住居跡出土遺物観察表 (第267図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環			5.6	GKL	A	灰色	10	下半ハケ状ナデ
2	甕			(8.4)	BCKL	A	暗灰色	10	
3	環	13.0	3.0	(8.4)	FK	A	淡橙褐色	20	
4	鉄製品	長さ(2.2)×幅0.5×厚さ0.35cm、重量1.17g							不明
5	鉄製品	長さ(3.1)×幅0.55×厚さ0.4cm、重量2.06g							釘?

持ちヘラケズリである。4・5は鉄製品の破片で、5は釘の可能性がある。ともに錆の進行が著しい。

遺物はいずれも浮いた状態であり、周辺からの混入も考えられるが、9世紀後半頃としておきたい。

第76号住居跡 (第268・269図)

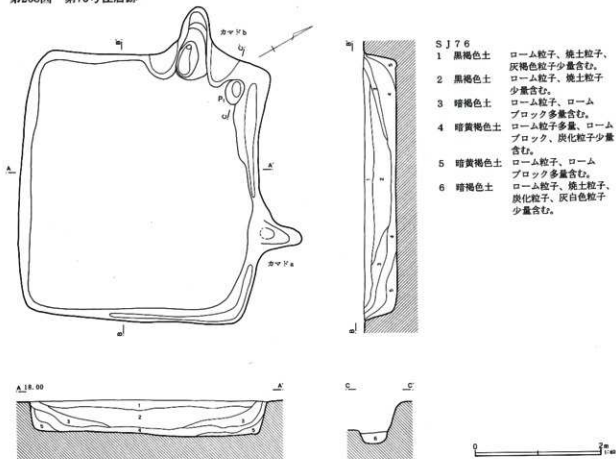
調査区の北西、U-7グリッドに位置している。他の遺構との重複関係もなく、遺存状態が良い。カマドは2基検出され、いずれも壁を掘り込んで構築されていた。平面形態は東西方向がやや長い長方形で、長辺4.30m、短辺3.54m、深さ0.48mである。主軸方向はN-47°-Wである。

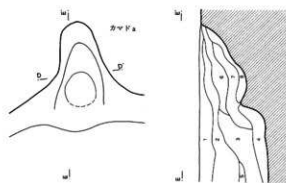
カマドは北辺(カマドa)と西辺(カマドb)に1基づつ検出された。カマドの新旧関係は、壁溝との関連やカマドの遺存状態からカマドaが古く、カマドbが新しいことか確認された。

カマドaは北辺やや東寄りに付設されているが、カマドb構築の際に袖は壊され、原形を留めていない。覆土は、燃焼面付近に攪乱が入る他は特に大きな土層変化はなく、カマドを廃棄する際、天井などを自然に残して埋め戻したものとみられる。燃焼面の底面は平坦で、掘り込みもなく床面と同一レベルである。遺物は出土しなかった。

カマドbは西辺の北寄りに付設され、カマドaとほぼ同一の規模をもっている。袖は左右とも良く残っており、ロームブロックと灰褐色粘土をベースに構築されている。燃焼部は床面から最大で約10cmの掘り込みをし、その上にロームブロックを入れて底面の調整を行なっている(調整面)。調整面および側壁は良く被熱が観察でき、カマドaに比べて長期間使用されたものと考えられる。また、燃焼面奥には土製の支脚が埋設された状態で出土している。遺物は須恵器坏、土師器

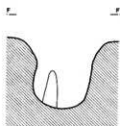
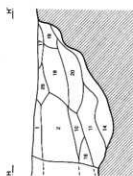
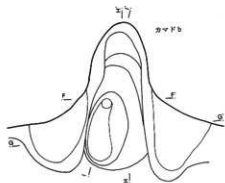
第268図 第76号住居跡





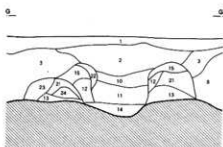
SJ76カマド a

- 1 黒褐色土 灰褐色粒子多量、ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子、炭化粒子微量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量、灰褐色粒子、焼土粒子、炭化粒子少量含む。
- 4 黒褐色土 灰褐色粒子、焼土粒子多量、ローム粒子少量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 6 赤褐色土 焼土粒子、炭化粒子、焼土ブロック多量、ローム粒子少量含む。
- 7 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子多量、灰色ブロック少量含む。
- 8 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。

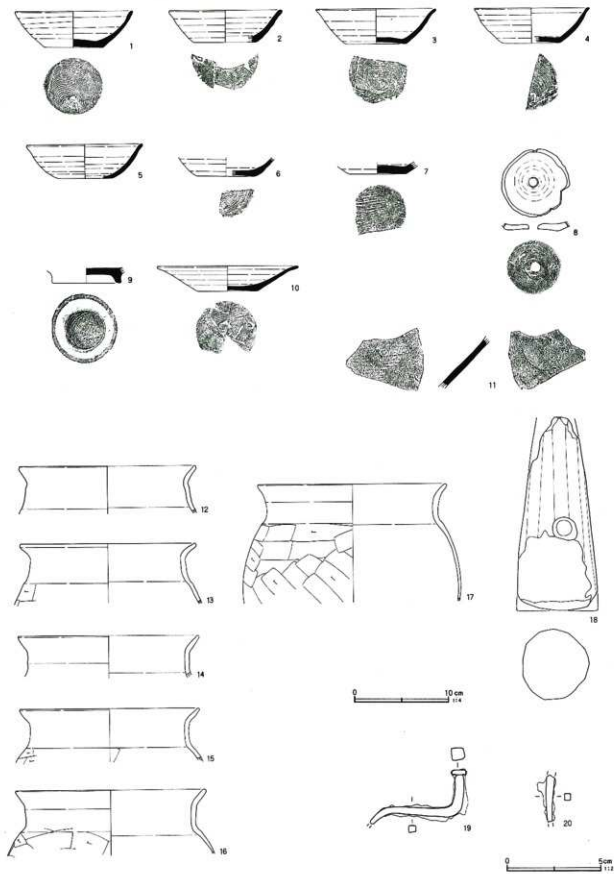


カマド b

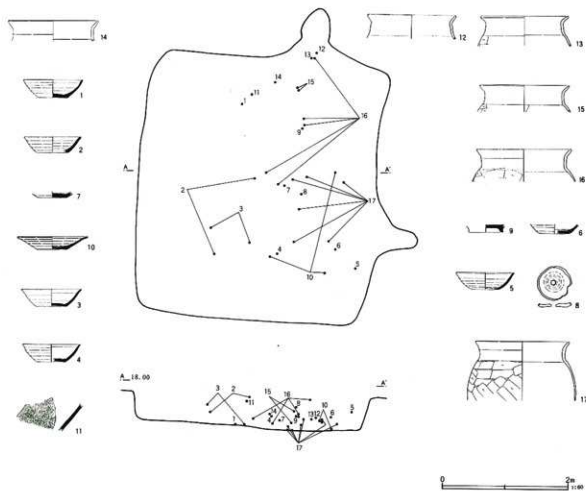
- 9 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。
- 10 灰褐色土 灰褐色粒子、焼土粒子多量、ローム粒子少量含む。
- 11 灰褐色土 灰褐色粒子、焼土粒子多量、ローム粒子、焼土ブロック少量含む。
- 12 灰色土 灰色粒子多量含む。
- 13 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- 14 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 15 灰褐色土 ローム粒子、灰褐色粒子多量含む。
- 16 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 17 暗褐色土 焼土粒子多量、ローム粒子少量含む。
- 18 暗褐色土 焼土粒子多量、炭化粒子、ローム粒子少量含む。
- 19 暗褐色土 焼土粒子多量、炭化粒子、焼土ブロック少量含む。
- 20 黒褐色土 焼土粒子、炭化粒子多量含む。
- 21 暗褐色土 灰褐色粒子多量含む。
- 22 暗褐色土 焼土粒子、灰褐色粒子多量含む。
- 23 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 24 暗灰褐色土 灰褐色粒子多量、ローム粒子少量含む。
- 25 灰赤褐色土 焼土粒子、焼土ブロック、灰褐色粒子多量、ローム粒子少量含む。



第270图 第76号住居跡出土遺物



第271図 第76号住居跡遺物分布図



甕などが出土している。

覆土は、焼土粒子や灰褐色粘土粒子を含む黒褐色土で構成される。土層に大きな変化はなく、自然堆積の可能性が高い。床面は平坦で、貼り床は検出されなかった。また、カマド周辺の床面には焼土が多く、釘も2点出土したが、小鍛冶に関連するような炉跡やスラグ等は検出されなかった。

貯蔵穴はカマドbの右側、北隅で検出された。平面形態は楕円形で、深さは約20cmである。壁溝はカマドaの周辺部に検出されたが、検出状況からはこの壁溝はカマドaに付属し、カマドb構築時には埋め戻されていたものと推定できる。また、柱穴等のピットは検出されなかった。

出土遺物 (第270図)

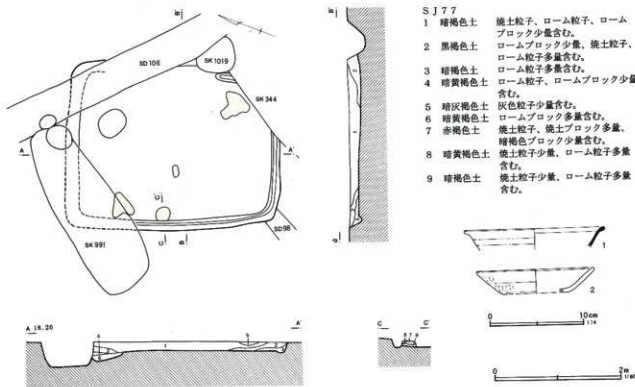
出土遺物には須恵器環、紡錘車、高台付塊、皿、甕、

土師器甕、支脚、釘がある。1～7は須恵器環で、口径12cm余り、底径6cm前後、器高3.7cm前後と規格化した土器である。1を除いては口縁部の先端がやや外反するもので、いずれも南比企産である。6は焼成温度が低く、淡橙黄色である。8は須恵器環の底部を転用した紡錘車で、中心部に直径約10mmの孔を穿ち、周囲は砥石などで丁寧に研かれている。9は須恵器高台付塊の底部破片で、未野産である。10は須恵器皿で、やや底径が大きい。南比企産。11は甕の胴部下半破片で、外面は平行叩きが残る。12～17は土師器甕の口縁部破片である。口縁部は、大きく分けて「コ」の字口縁のタイプと「コ」の字口縁が少し崩れてきたタイプの2種類がある。一部の甕には外面に炭化物の付着がみられる。18は土製の支脚で、縦方向に削って調整されている。側面中央部には直径約2cm、深さ約1cmの円

第76号住居跡出土遺物観察表 (第270図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	坏	12.5	3.9	6.2	CDKL	A	灰色	90	口縁部にわずかに油煙のようなもの付着	
2	坏	(12.0)	3.4	(6.8)	CKL	A	灰白色	20		
3	坏	(12.7)	3.7	6.3	CKL	A	褐色	30	内外面に炭化物付着 内面割離	
4	坏	(12.2)	3.7	(5.8)	CGKL	A	灰色	30		
5	坏	(12.4)	3.6	(5.8)	CKL	C	灰オリーブ色	10	外面火だすき痕	
6	坏			(6.2)	BFIKL	A	浅黄褐色	10		
7	坏			6.2	CKL	A	灰色	10	底部に先の尖っている物を研いだような痕あり	
8	紡錘車	長径7.2×短径7.2cm			BKL	A	灰色	10	孔径1.0×厚さ0.7cm、重量39.8g 須恵器坏の転用	
9	高台付埴			7.3	CKL	A	灰白色	10		
10	皿	15.0	2.7	6.4	KL	A	灰色	60	内面自然釉 外面火だすき痕	
11	甕				CKL	A	灰色	10	内面に付着物	
12	甕	(18.8)			BEFHKL	A	橙褐色	10	内面割離	
13	甕	(18.8)			BEFIKL	A	橙褐色	10	内面風化	
14	甕	(19.2)			BFKL	A	明赤褐色	10	口縁内面に付着物	
15	甕	(19.2)			BHKL	A	明赤褐色	10	内面割離	
16	甕	(20.2)			BKL	A	赤褐色	10	内面割離著しい	
17	甕	20.2			BKL	A	暗赤褐色	20	内面風化	
18	支脚	長さ(20.5)×幅7.0×厚さ7.5cm								
19	釘	長さ4.8×幅0.4×厚さ0.35cm、重量5.10g								
20	釘	長さ2.4×幅0.35×厚さ0.3cm、重量0.86g								釘の基部か?

第272図 第77号住居跡・出土遺物



第77号住居跡出土遺物観察表 (第272図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台付埴	(15.0)			BDKL	A	灰色	10	
2	坏	(12.6)	2.5	7.5	K	A	暗灰褐色	15	土師器

錐形の孔が穿たれている。19・20は釘で、19は鍵状に折れている。錆により不鮮明であるが、断面は方形とみられる。

住居跡は、出土遺物から9世紀後半と考えられる。

第77号住居跡 (第272図)

調査区の中央、やや西寄りR-9グリッドに位置している。S J 70の北、約2mに隣接している。SK344・991・1019、SD98・106と重複しているが、いずれの遺構よりも古いと判断した。平面形態は長方形で、規模は長辺3.38m、短辺2.86m、深さ0.12mであるが、長辺・短辺は他の遺構や攪乱との重複もあるため、若干広がるものと予想される。主軸方向はN-71-Eである。

カマドは他の遺構との重複により、検出することはできなかった。SK344またはSD106付近がカマドの位置として可能性が高いが、いずれも深く掘り込まれており、確認不可能であった。

覆土は、ローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土で構成されるが、所々ロームブロックがまとまって入るところもあり、人為的に埋め戻されている可能性もある。床面は平坦で、貼り床や柱穴は検出されなかった。壁溝は他の遺構と重複するため不鮮明であるが、全周するものと考えられる。

出土遺物 (第272図)

出土遺物には須恵器高台付碗(または杯)、土師器杯がある。遺物は他に土師器甕とみられる小破片が数点出土したが、実測不可能なため割愛した。遺物は他の遺構との重複のためか殆ど浮いた状態で出土している。1は須恵器高台付碗の口縁部破片とみられる。2は土師器杯の破片で、口縁部及び体部は横なで後、指頭で再調整する。底部は手持ちヘラケズリである。

住居跡の出土遺物が少なく、しかもS J 70に隣接することや重複する遺構が多いことなどから周囲から混入した可能性も考えられる。掲載した遺物の年代については、9世紀後半～10世紀初め頃と考えられる。

第273図 第77号住居跡遺物分布図

